「G-CLASS 2026」出場選手に訊く ① 田村ハヤト

物事を形にするのは自分の中で ポジティブな発想ができるかどうか

5月13日より開幕するGLEATのシングルトーナメント「G-CLASS 2026」。昨年に続く第2回は、厳選された8名のエントリー選手によって争われる。そこで出場全選手に意気込みを訊くインタビューを順次お届けする。第1回は、4月29日に地元・群馬での凱旋興行も控える田村ハヤトが登場。長期欠場から復帰し、5ヵ月が経過した現在の心中を語った。(聞き手・鈴木健.txt)

Tさんと組んでいるとリングの中より コーナーで控えている時の方が疲れる

――ハヤト選手は昨年の「G-CLASS」開催時は欠場中でしたので、今回が初エントリーとなります。

田村　シングルのトーナメントとしては、2022年のG-REX初代王者決定トーナメントには出ていて、準優勝だったんですよね(エル・リンダマンに敗れる)。だから、その先を目指すという意味でもトーナメントといったら僕じゃないですか。トーナメント大好き、一発勝負に強い男なんで。

――甲子園でそれを証明しているので、説得力があります。

田村　そういう意味では、トーナメント歴の長い人間なんですよ。もちろんタイトルマッチとは違うものですけど、ちっちゃい頃から何事にも一番になりたい性格ですから優勝することが自分の目的意識を満たしますし、おそらくこれで優勝すれば7月1日(5周年記念大会)に挑戦ですよね?

――正式には決まっていないですが、時期的にはそうなるでしょうね。

田村　だから僕の中では優勝したあとのプランも描けていますし、何よりも1回戦がTさん(T-Hawk)っていうのがね。過去のシングルマッチはユニットも違ってずっとやり合う関係にあったのが、今回はまったく違うシチュエーショ

ンじゃないですか。
――タッグパートナー同士の一騎打ちとなります。
田村　でもやりづらさはまったくないです。組んでいても、1対1で闘うとなれば最大限のリスペクトを持ちつつ、全力で叩き潰し合えると思っているので。
――過去3度シングルで対戦し、戦績はT-Hawk選手の2勝1敗ですが、一番近い一騎打ち（2023年12月30日、TDCホール）ではハヤト選手が勝ってG-REX王座を奪取しています。
田村　組んでみて見えたのが、溢れるエナジーですよね。僕がG-REXのチャンピオンになった時に欠けていたものを、今のTさんが体全体から放っている。それを僕が一番の至近距離から浴びている感じです。本来の僕は、同じようにエネルギッシュな人間なんですけど、ベルトを持っていた時はチャンピオンとしてどうあるべきかということですごく悩んでいて、本来の自分が出せなかった気がするんです。でも、復帰してTさんと組むようになってから、本来の自分を取り戻せた。
――T-Hawk選手のノリに乗せられている？
田村　引き出されていますね。それによって逆にTさんからも引き出せていると思うし。僕は子どもの頃から、野球をやっていて声を出すのが習慣になっているんです。出さないと怒られていましたから。だから今のノリが懐かしい感覚ですよね。
――よく二人であれほど大きな声をずっと出し合っているなと感心します。
田村　あれ、メチャクチャ疲れるんですよ。これもTさんと組み始めて気づいたことなんですけど、リングの中で闘っている間よりもコーナーで控えている時の方が疲れるんです。
――本来、スタミナを回復させるはずのコーナーなのにむしろ消耗していると。
田村　いやあ、参りました。でも、必要以上に声を出すことによってお客さんにも元気が伝わるじゃないですか。この声で、少しでもお客さんが元気になっ

てくれればと思うと、苦にならないんですよ。
――それはとてもいいことだと思いますが、声がデカすぎて聞き取れないと元も子もないです。
田村　そうなんですよね。自分ら同士も実は半分ぐらい聞き取れていないですから。
――聞こえていないのに会話が進んでいるんですか。
田村　もう、半分ノリでいっていますよ。お互いの声が被る時もしょっちゅうだし。でも、なんとなく言わんとしていることは理解できるので。
――よく会話が成り立っているなと感心するレベルです。
田村　僕も不思議なんですよね。会話に限らずここまで組んで噛み合うとは正直、思っていなかったので。本当にたまたま一回組んでみたら、観客や周りの反応がけっこうよかったんです。それで、じゃあこのままいこうかという感じで続いた。
――長期欠場明けの昨年12・４新宿FACEで初めて組んで、次の大会ではもう空位だったG-INFINITY王座決定トーナメントにエントリーされていました。
田村　そう、だから組み始めてまだそんなにやっていないんですよね。それが年明けにG-INFINITYへ挑戦したじゃないですか（１・20新宿）。あれも獲れなかったけど試合をやっていて今まで体験していないほどしっくりと来たんです。やっぱり、うまくいくと楽しくなるものなんですよね。
――ノリとしてはベタなほどに野球経験者というカラーを前面に出していますね。
田村　いやあ、当時（高校時代）の先輩を思い出します。ああいうTさんみたいな先輩が実際にいたんですよ。だから誤爆して張られるたびにその先輩の顔が浮かんでくる。
――ちなみにその方は今どこで何を？
田村　わからないです。野球はもう、やっていないんじゃないですかね。
――では、その先輩の代わりにT-Hawk選手とタッグを組んでいるような感覚？
田村　まあ、野球にタッグはないけど懐かしい気はします。
――入場時のポーズで、ハヤト選手がキャッチングスタイルでT-Hawk選手がバッターボックスに立つじゃないですか。あれ、なんで逆にしないんですか。高校時代にキャッチャーだったのはT-Hawk選手の方ですよね。
田村　そうなんですよ！　Tさんがキャッチャーなのに。なんでなのか僕も聞いたら「ヒザが痛いから座って」って言われました。俺も腰いてえんだけどなと思いながら、座っていますけど。僕はレフトでしたけど守備よりもバッティングの方で目立っていましたから、それだったらバッターの構えの方が向いていると思うんですけど。
――やったことがないキャッチャーの構えを。
田村　見様見真似で。でも、絵ヅラ的には僕がやった方がしっくりくるのも確かなんですよね。
――体型的にはそうです。
田村　撮影会になると「お二人の決めポーズで撮りたいんです」ってよくリクエストされるんです。そのたびに僕がひたすら座って、お客さんはその後ろに回って審判のポーズを撮りたがるという。
――いいサービスですね。
田村　だから、いい形ではあるなと。正直、野球の色がここまでプロレスで出せるとは思っていなかったですから。相手をロープに振って、二人でバットのスイングをするという合体プレーもやってみたんですけど、あんなのは今までやったことがなかったですから。そういうタイミングで二人が闘うわけですから、これは相当なエナジーが放出される試合になるでしょう。

――お客さんは耳栓を用意した方がいいかもしれません。
田村　そこもお互い遠慮はしないですから。声出しも張り合っちゃうんでしょうね。その上でバッチバチにやり合う。おそらく1回戦4試合で一番お客さんも一緒にノレる試合になると思います。
――トーナメントというのを抜きにして、私の中では田村ハヤトvsT-HawkというカードはGLEATにおける一つのブランドなんです。回を重ねるごとに熱量が上がっていくという意味で。
田村　僕自身も過去の3回とはまったく違うものになるという予感がします。だから、二人の闘いの進化している部分も見せられると思っています。

今の河上さんが本来の姿だと思うけど
僕とやる時は怖い一面を見せてほしい

――そうした熱い闘い間違いなしの1回戦を勝ち進んだあとが、河上隆一かブラスナックルJUNというのも、ガラリと感覚が変わります。
田村　僕はまだ今のブラスナックルJUNとほとんどやっていないんで、シングルでやったらどうなるのかっていうのはあるんですけど、ここは河上さんとやりたいです。BULK ORCHESTRAの時はずっと組んでいたし、やり合うこともあったけどヘビー級の闘いを見せられる相手なんで、久しぶりに“シャーマン”ではない河上隆一と肌を合わせたい。
――シャーマンではなくなった河上隆一はどう映っていますか。
田村　なんか、何をやっても許される存在になりましたよね。正直、ほぼ空回りじゃないですか。だけど、それでもOKみたいなキャラクターになっている。でも僕とシングルでやる時は怖い一面を見せてほしい。今の明るいキャラクターはもちろんいいと思うんですけど、僕とやるなら誰もそれは求めていないと思うんで。その上で僕は、河上隆一の本気の本気を全部受け止めるつもりでいる。120%の河上隆一でぶつかってきてもわらないと、やる意味がないでしょう。今のノリで来るぐらいならブラスナックルJUNとやった方がまだいい。
――あの方向転換自体はどう受け取っているのでしょう。
田村　いいんじゃないですか。ぶっちゃけ、あれが河上さんの本来の姿だと思うんで。
――無理しているのではなく、あれが素性なんですね。
田村　もちろんプロレスラーとしては怖い一面も持っていますけど、人間とし

ではあれが河上さん。それを本人が包み隠すことなく前面に出そうとしたのであれば、それで突っ走るしかないと思うんですよね。
――あれが素顔だとすると、シャーマンの頃は…。
田村　シャーマンの頃は頑張っていました、うん。
――頑張っていた！
田村　本来の河上隆一じゃないなって思っていました。明るいキャラクターだけど、闘えばパワフルファイターというのが河上隆一ですから、あんな暗闇がどうこう言っているのは、頑張ってやっているようにしか見えなかったです。
――だとしたら、やはり今の方がいいんでしょうね。
田村　でも、明るさとフザケたノリは別モノですから。そんな感じで来たら、速攻終わらせます。
――別ブロックの４人に関しては、どうでしょう。
田村　僕は石田凱士が来ると思います。これは願望込みでもあるんですけど、今のこのタイミングでやってみたい気がして。実を言うと、まだシングルマッチで一度もやっていないんですよね。
――それは意外でした。

田村　だから初のシングルマッチがトーナメントの決勝戦というのもシチュエーション的にいいし、やっぱりGLEATの未来を見せるのはこのカードだろって。リンダマンとは、トーナメントに優勝すればさっきも言ったように7月1日にベルトを懸けてやるようになるでしょうから、その前に石田とバチバチの闘いをやっておきたいです。

――長期欠場から復帰して5ヵ月が経ちますが、復調具合はどうでしょう。

田村　これがね、絶好調なんですよ。5ヵ月でトーナメントに優勝して5周年のメインまでいけるという感触が持てるほどになっています。約1年休んで、遅れた分を早く取り戻したかったので休んでいる間もやれることはしっかりやっていたし、復帰のタイミングもこれなら今すぐ100%出せるところまで戻ったという確信があった上だったので、復帰戦の時点でフルに動けていました。

――確かに復帰後、ブランクはまったく感じさせていないです。

田村　だから、復帰明けでTさんと組んだのもいいタイミングだったんだと思います。組むべくして、こうなったんだなって。僕の中に、GLEATって明るさが大事だっていうのがあるんです。正直、去年は明るいニュースがあまりなかったじゃないですか。休んでいる間にネットで情報を見ていてもネガティブなニュースしか伝わってこなかった。だから自分がリングに戻ったらとことん明るくしてやると思っていました。明るく、元気に、わかりやすくて伝わりやすいプロレスを見せていきたい。Tさんと組むことで、今はそれができていると思うんですよね。

――まあ、わかりやすいですよね。

田村　僕がお客さんの立場で見ても、今のGLEATは見やすいと映っている。なので、これを継続すれば少しずつかもしれないけど確実にお客さんは増えていくと思っています。

初の凱旋興行をプロレスの入り口に。そのためにもわかりやすい試合を

――そんな中、4月29日にはGメッセ群馬で地元凱旋興行があります。

田村　プロレスラーになって7年目にして、初めて群馬県でプロレスの試合ができます。前の団体の代表（JUST TAP OUT・TAKAみちのく）にはやろうって言われていたんですけど、やらないままやめちゃったんで。でも、自分で営業回りをやってみて想像以上に大変だと感じました。僕はお世話になった方に対しLINEとかじゃなく直接お会いしているんです。見に来てほしいと思ったら、ポスターを送りつけて貼ってもらって終わりじゃなく、まずはお願いをしにいっています。だから、けっこう回りまくっていて。でもその結果、野球部の監督やコーチ、現役の生徒たち野球部全員で来てくれるんです。

――前橋育英高校野球部が全員で応援に！

田村　やっぱり、お世話になった恩師や今の高校生にプロレスラーとしてやっている姿を見せたいので。監督さんから「みんな連れていくから」と言われた時は嬉しかったですよね。

――前橋から高崎にあるGメッセまではそれほど遠くないんですよね。

田村　むしろ近いです。自転車で15～20分ぐらいでいけます。やるとしたらGメッセでやりたかったんです。新日本プロレスさんもやっているし、会場も新しくてきれいだし。Gメッセって僕が東京へ出たあとにできたんで見にいったことはないんですけど、高崎の駅からも徒歩でいけるので便利だし、東京からも近いんですよ。

――新幹線で1時間かからないですからね。「ホームセンターセキチューPresents」と、スポンサードもしてもらえました。

田村　地元の企業さんの理解を得られたのはありがたいとともに、地元出身者としてはステータスじゃないですか。それ以外にも群栄化学工業さんとい

う県内で有名な半導体メーカーの会社にもご協力いただいていますし、メディアの方でも群馬テレビさん、上毛新聞さん、エフエム群馬さんについていただけると。

――群馬のメディア総出じゃないですか。

田村　セキチューさんの社長さんがスポーツを応援されている方で、群馬ダイヤモンドペガサス（プロ野球独立リーグチーム）や、ザスパクサツ群馬（プロサッカーチーム）のバックアップもしているし、新日本さんのBEST OF THE SUPER Jr.をスポンサードしている企業なんです。その会社がスポンサーになってくれたんですから…。

――ある意味、そこに田村ハヤトが並んだ形になります。

田村　嬉しいですよね。だから、群馬出身の僕をきっかけにしてプロレスを好きになってもらいたい。当日は、初めて生で見る方やそこまでプロレスに詳しくない方も多いと思うので、この大会をプロレスへの入り口にしてもらいたいです。

――凱旋興行は、それが持ち味ですよね。

田村　そのためには、こういう大会こそザ・プロレスと言えるようなわかりやすいものがいいと思うんですよ。まだカードは決まっていないですけど、僕のイメージとしてはやっぱりTさんと組んでBLACK GENERATION INTERNATIONALと闘うのが一番、今のGLEATを見せられると思っています。（対戦カードはハヤト & 伊藤貴則 & 河上隆一 vs<B.G.I.>石田凱士 & 渡辺壮馬 & KAZMA SAKAMOTOに決定）

――それにしても、全国優勝を果たした地元の高校球児が、十数年経ったらプロレスラーになって帰ってきてその姿を披露するというのもいい話だなと思います。

田村　当時を知っている人は、僕の姿が変わりすぎちゃっているからビックリするでしょうね、溜めに溜めた分。今のところ、次にやるとしたらちょっと間を空けたいとは思っているんです。それほど今回、やってみて大変だったので。でも、初めて見に来た方に「来年もまた見に来たいです」って言われたら、僕は単純なので「やろう！」ってなっちゃうと思うんです。

――流れ的にもT-Hawk選手とのタッグ結成→凱旋興行→G-CLASS→5周年興行と、途切れることなくテーマであったり打ち込めるものであったりが続くのもいい流れです。

田村　そうなんです。僕はけっこう先のヴィジョンを見据えて動くタイプなんで、こういう環境が続けばポジティブな方に向かっていけると思うんですよね。物事を形にするのって、自分の中でポジティブな発想ができるかどうかだと思っていて。高校の時も、3年の夏に甲子園へ出てホームランを打つという

のを頭の中で描いていました。だから、あの場へ立った時はホームランしか狙わなかったですから。
――それを実際にやってしまうという。
田村　その経験によって、僕はいい未来を想像しておけばそこにたどり着くんだって信じられるようになったんです。
――そのいい未来は、GLEATに関してはどんなものを描いていますか。
田村　僕の中に浮かぶのはどの会場もパンパンに埋まって、もっともっと歓声や声援が飛ぶ空間ですね。今もいただけるのはありがたいですけど、その量が増えるほど僕のパフォーマンスも上がりますから。あとは、自分がチャンピオンベルトを巻くことでお客さんの数が増えて会社が潤って、GLEATを広めていく。それを頭の中で想像しています。ベルトを持つ意味っていうんですかね、それは自分の強さを証明するのと同時に、持った人間が背負うべき役割も付随してくるものじゃないですか。今よりもお客さんを増やして、歓声を増やすという望むべきことを、ほかの誰かじゃなく自分の手で形にしたいんです。それがGLEATにとってのよい未来にもなると思うし。
――広めるという意味では、現在保持しているアップタウンのベルトのように他団体で実績を上げることもつながってきます。
田村　僕は常に、どのリングに上がっても闘える、通用する肉体は作りあげておきたいというのがあって、それこそGLEATのチャンピオンだけどほかの団体のヘビー級とはやり合えないじゃダメだと思うんです。チャンピオンはどこにいってもチャンピオンであるべき。アップタウンのベルトに関しても、そういう姿勢で持っているつもりです。

――そのアップタウン王座の防衛戦で、ベアハッグでギブアップ勝ちしたじゃないですか（４・５新宿、佐々木幹矢を相手に２度目の防衛）。ああいうクラシカルな技を必殺技として蘇らせられるのも、ハヤト選手ならではだと思います。

田村　僕、昔の技が好きなんですよ。それこそシンプルでわかりやすいじゃないですか。今は派手な技や複雑な技が多くて、昔ながらの技はあまり使われないので逆をいってやろうかと。そういう技で決めるのって「ああ、これだったら決まるわ」と思わせる説得力が必要ですよね。僕にはそれを出せる肉体があるので、失われた必殺技のようなものはこれからも使っていきたい。一つひとつの技を丁寧に、大切に使っていきたいんです。捨て身の技は使わない。バチバチ激しくやり合う中でも、自分で健康な体をぶっ壊しにはいきたくないんで。

――健康的な体の維持は、現役を続ける中で重要なテーマです。

田村　ヒザがボロボロになるような技は使わないです。もちろん、それでも続けている選手は凄いと思いますけど、いいパフォーマンスをするには健康的な体でいるのがベストですし、シンプルな技でちゃんと伝わる方が達成感も味わえる。だから今後もベアハッグをつなぎ技ではなく、ちゃんと常にギブアップを獲れるまで磨き上げます。そして、オリジナルの技名なんてつけずに「ベアハッグ」の名称で使い続けます。

「G-CLASS 2026」出場選手に訊く ②T-Hawk

「グレイトしようぜ！」という フレームだけだったらいらない

5月13日より開幕するGLEATのシングルトーナメント「G-CLASS 2026」エントリー選手インタビューの第2弾は、T-Hawkが登場。1回戦の対戦相手である田村ハヤトは現在のタッグパートナーであり、同じくトーナメントと前後して凱旋興行をおこなう身。そんな中、T-Hawkの口から出たのは「グレイトしようぜ！って何？」という問題提起だった。（聞き手・鈴木健.txt）

田村ハヤトとはミニマリスト同士の プロレスを第1試合でやりたい

――T-Hawk選手は昨年に続いての「G-CLASS」エントリーとなります。

T-Hawk　前回の16選手エントリーから8人になったことで雑味がないというか、よりピュアな今のGLEATのトップ8人がエントリーされたトーナメントであることが、僕の中では大きいです。前回、僕は愛鷹亮さんに準決勝で負けたんですけど、愛鷹さんっていったら年齢は上にしても、プロレスキャリアに関してはその時点でペーペーだったじゃないですか。それで、なんとかしてあげようという謎の親心のようなものが出ちゃったんです。それに対し今回はよりならされたというか、フラットに臨めるトーナメントという意味で楽しみにしています。

――厳選という点では伊藤貴則、渡辺壮馬、井土徹也だけでなく田中稔、鈴木鼓太郎という実績十分な選手でさえエントリーされなかったですからね。

T-Hawk　来年はもしかすると僕が入れないかもしれない。去年は第1回目だったから、そういう危機感のようなものはなかったですけど、まだ歴史がないこともあって単発で終わった印象だったんです。あそこで生み出されたもの

があとに続かなかった。
――優勝した中嶋勝彦選手が直後にG-REX王者になるという流れこそあったものの、トーナメント自体はその過程という見方で終わってしまったかもしれません。
T-Hawk　僕、最近ね、Netflixに入ったんですよ。
――今ですか!?
T-Hawk　流行りものには手を出さないという逆張り精神があったんです。でも、見てみたらNetflixのプログラムって続きが見たくなるように、45～50分で作られているんですよね。そういうネトフリ感がウチにもほしいと思っていて、あとは民放では表現できない危うさもあるじゃないですか。それをGLEATではできるんじゃないかって、見ながら思ったんですよね。2026年に関することというよりも、その先…Seasonが続くような感覚で見られるようにしていきたい。だからトーナメントで誰々が優勝しました、めでたしめでたしで終わらせちゃいけないんです。
――その1回戦の相手が、田村ハヤト選手です。
T-Hawk　“高校野球の名門対決”っていう括りが落ち着くんでしょうけど、それ以上に僕も田村くんも小賢しいことはなしでいくタイプだから、彼ならタックル、ラリアット、僕なら張り手、チョップというようにミニマリストのように表現できる唯一の二人だと思うんです。技を制限して、絞って絞って、より真正面からぶつかり合うプロレスを最大に突きつめた形でやれるのが僕ら二人。そういうプロレスを、第1試合で見せたい。先にあげた4つの技しかほぼほぼ出ないけど、ザッツ・プロレスというのを感じさせる…スタイリッシュとか疾走感といったベースをフル無視してやりたい。それをド頭で見せた時に、どんな空気になるのか感じてみたいんですよね。
――本当に第1試合に組まれたら、まさにつかみはOK的なものになるでしょう。
T-Hawk　過去に3度シングルでやっていますけど、あの時の田村くんとは

別人だと思っていて。今はアメ車なのに小回りが効く感じ。遺伝子からして違うような。
――そんなに違うんですか。
T-Hawk　長期欠場から帰ってきた時に、すごくクリアになった印象を持ったんです。前はラテだったのが、アクエリアスのような清涼飲料感がある。混ぜ物はいらない状態になっているから、前とは違うアプローチに僕もなると思います。よく、組んでいる人間と闘うのはどうなのって言われますけど正直、組んでも1対1で向き合っていますから。彼も前に出たがるじゃないですか。僕も出たがりだから、明らかに組みながら闘っているんですよ。存在感で負けないぞっていう火の粉が隣からかかってくる。
――逆に、なぜ今は組んでいるのでしょう。
T-Hawk　もちろんGLEAT全員でっていうのはありつつも、僕は内にしろ外にしろ蹴落としたいタイプなんで、それを組むことによって感じさせるのが田村ハヤトなんです。変にタッグチームとしてまとめようとしないし、でも熱量は伝わってくる。GLEATも、去年のことは今となってはもうどうでもいいんですけど、変にまとめようとしている感じがある。それに対し、そうじゃないだろって思う自分がいるんですよね。主張してナンボだし、自分の意見を言ってナンボ…そもそも「グレイトしようぜ！」って何？って思っています。それはこのタイミングだからこそ思うことで、歴史がまだ浅いからこそブチ壊せるんですよ。フレームだけ作っちゃって、あとから中身を作るよりも、一回その枠を壊して復興した方が、みんなで一緒にできる気がするんですよね。それには全員が一人で闘うトーナメントをきっかけにするのがいいタイミングなのかなと。
――「グレイトしようぜ」のスローガンを掲げながら、その枠ばかりにとらわれて中が見えて来ていないということですか。
T-Hawk　そう、だからフレームなんていらんですよ。俺、あまりやったことないですから。しゃあなしにやることはあっても。
――しゃあなしに。
T-Hawk　「これってどうなの？」と疑問に思うのって大事だと思うから。でも逆に田村ハヤトって、何も考えていないのがいいところで、変にこねくり回すとそれは違うと思うんですよね。
――放し飼いにしておいた方がいいと。
T-Hawk　そう、放し飼いですよ。リード・フル無視の放牧状態。
――お二人のチームって、まだ正式名が決まっていないんですよね。そのつど暫定的な呼び方はつけていますが。
T-Hawk　これも絞りたくないんですよ。ジャズのセッションのように、バンドスコアもいらない。だから今後もチーム名はつけるつもりないです。
――譜面なしでやった結果、よく誤爆しますが。
T-Hawk　あれはあれでいいんです、池乃めだか師匠のようなもので。僕はちゃんと相手を狙っているんですけど、めだか師匠が出てきてしまう。
――どうしてめだか師匠が出てきてしまうのか。
T-Hawk　ここに来たらこれが見られるっていうのも大事じゃないですか。かといって、お客さんが求めているものに寄り添いすぎるのもダメなんですけど。
――明らかに観客は求めています。
T-Hawk　……求めてますね。そこはお客さんとのセッションです。音を合わせすぎず、かつ息は合っているような。
――あれほど誤爆しながら仲間割れしないのもすごいと思うんです。
T-Hawk　だって、明らかにあいつもほしがっているじゃないですか。お客さんもほしがり、田村もほしがると僕の中の悪魔が出てきて、今日はやらんってなることもある。それもまた、闘いなんですよ。全方位と闘っている。僕はキャッチャーをやっていたからインコースを投げさせるだけじゃなく外角も高

さも奥行きもつけなきゃいいリードはできないという考えなんで、そこは散らしていきます。
――これは田村選手にも聞いたんですけど、二人でポーズをとる時になぜかキャッチャー出身のT-Hawk選手がバッティングポーズをとって、キャッチングスタイルを田村選手にやらせていますよね。
T-Hawk　それは僕が先輩だからです。
――ここに来て縦社会を持ち出す！
T-Hawk　そこも闘いですよ。田村はバッターをやりたがったんです。それで僕が「おまえ、後輩やろ」って。そこも田村はわかっているんですよ。今の時代って上下関係の文化が疎まれて、運動会の徒競走でも手をつないで一緒にゴールしましょう的なものがあるじゃないですか。
――格差をつけると文句が出るという。
T-Hawk　そんなもん、知らんって。僕も田村もゴリゴリの上下関係文化で育ってきて、受け身がとれるんですよ。田村は、後輩の受け身。ああいうのは大事ですよ。縦社会における受け身のとり方って、一般社会に出ても身についている人間は有能じゃないですか。プロレス以外でも大事だと思いますよ。だから先輩がバッターなのは当然であり、そこは僕も譲れないものがある。

100%面白くなるって、裏を返せばつまらないんですよね

――じゃあ、ずっとあのままですね。自分と田村選手以外のマークする選手は誰になりますか。
T-Hawk　めちゃくちゃベタでやってみたいのはKAZMAと石田です。特にKAZMAとはシングルでやったことがないのもあるし、打ったら返ってくるタイプだから好きだし、そういう単純なやり合いをやってみたい。石田に関してはよくも悪くも闘う上で一番手が合う。あとはチャンピオンのリンダマンともやっておきたいし。この前（４・８新宿）やってみて、やっぱり楽しかったのもあるんですけど、今のリンダマンを見ているとチャンピオンとして団体を守るとか引っ張っていく責任感が先走っちゃっていて、なんていうか…ベルトに旅をさせてあげていない気がするんです。
――ベルトに旅をさせる？
T-Hawk　たとえばですけど、今は休んでいる三宅豪に対し復帰戦でタイト

ルマッチをやるぞっていうぐらいのことをやってもいいと思うんですよね。ただ防衛回数を重ねるだけだと、インコースまっすぐだけのリードになってしまう。チャンピオンが球を散らしたら、その方が面白いじゃないですか。
――別ブロックはその3人と山村武寛選手です。
T-Hawk　反対ブロックって全員間違いないというか、期待値を超えてくる４人なんですよね。ただ、それが「おいおいおいおい!?」ってなるかといったら違う。100%面白くなるって、裏を返せばつまらないんですよね。
――どうなっちゃうんだ!?と、想像を膨らませることができるかどうかということですか。
T-Hawk　そうです。でも、こっちのブロックは田村ハヤト、河上隆一、ブラスナックルJUNとざわざわしませんか？　外資系銀行マンと居酒屋系に分かれている。居酒屋系は赤ちょうちんをくぐったら意外と旨い串焼きに出逢うかもしれないけど、あっちのブロックは入る前から確実に旨い。食べログの評価も高い。僕らの方は1と5に評価が集中して、会計が合っているかどうかも怪しい店。外資系の中から勝ち上がってくるのは…リンダマンだと思うけど、個人的オッズはKAZMAで。
――KAZMA選手は願望の強さで？
T-Hawk　あの人って、わざと引っ込んでいる気がするんですよ。それをして、俺はシングルが嫌いとか苦手とかそういう言葉を使うけど、そこを楽しくさせてあげたいし、シングルで火を点けるとしたら僕が一番得意なんで。皆さんにお聞きしたいんですけど、俺とシングルマッチでやった人間って、みんないつもと違う感じがしません？
――言われてみれば。
T-Hawk　ケツを叩くのが、昔から得意だと自分では思っています。団体のエースとは違うかもしれないけど、その役割は僕しかできないと思う。パーン！と張ってみたい。
――張り手をもらって我を忘れてエキサイトするKAZMA選手は、確かに見たイメージがないです。ただ、これほど長い付き合いの中で、やはり今でもエル・リンダマンは闘いたい相手なんですね。
T-Hawk　そこは今だからこそより純度が高いと思うんです。お互いが三十代に入って、より生々しいプロレスができる気がして。
――ところで、今の河上隆一選手はどのように映っているんですか。
T-Hawk　あれはサーティワンです。ワクワクさせて終わり。この前、河上さ

んのSNSを見たらかわいいサンドイッチの画像が上げられていたんですよ。それで僕も、かわいいものを食べたらあいつの気持ちがわかるんじゃないかと思って、かわいいっていえばなんだろうと考えた結果、サーティワンにいったんです、普段はアイス食べないのに。それで“かわいい”というのも必要なんだという結論に至りました。ウチってビターな人が多いじゃないですか。その中にサーティワンのような…あの人、シュークリームがどうのって言っていたんですよね？

――はい、公式インタビューの中で「シュークリームのようなプロレスラーになりたい」と夢を語っていました。

T-Hawk　真壁（刀義）さんとはまた違ったスイーツレスラーの形ですよ。サーティワンの看板ってポップですよね。河上隆一もポップな看板でいい。中身は俺に任せてもらって、看板を全うしてください。

――T-Hawk選手は比較的すんなりと受け入れていますよね。伊藤貴則選手はいまだに憤っています。

T-Hawk　実は、リーダー（河上）と飲んだんですよ。それで腹を割って話してみたら、意外と熱いんです。サーティワンがあると思ってモールに入ったら、ゴリゴリのステーキハウスが並んでいたような感じで、けっこう男らしいことを言うんです。自分の持論もちゃんと持っているし。でも入り口はポップじゃないですか。あれはズルいよ。入り口がカラフルなのに、引き込んだらしっかりしたモノを出してくる。歯応えのあるウェルダンでも旨かったら、みんな持っていかれるでしょ。

――伊藤選手は、その言葉巧みなところが逆に信用できないそうなんです。だから「みんな、いったいどうしちゃったんだよ！」となっているようで…。

T-Hawk　そこは僕の場合、逆によくもあんな七変化できるなと感心してしまうんで。大日本プロレス時代にシングルマッチでやったことがあったんですけど、今と全然違いますよね。

――では、信用しているんですね。

T-Hawk　（小声で）信用はしていないです。まったくしてない。でも、勝手に面白がっている。

――面白がる対象だと。

T-Hawk　変な話、今一番数字が取れるのって林執行役員かブラスナックルJUNか河上なんですよ。その字ヅラだけでも面白くないですか。

――確かに河上選手とブラスナックル選手の公式インタビューは、SNS上の反響が凄まじかったです。

T-Hawk　あれは僕も面白がれました。

――まあ、面白がる距離感が一番いいのかもしれません。

T-Hawk　僕は一番熱いけど、一番ドライもあるんです。だから面白がれるし、でも今ならJUNとやりたいと思うという。ようやくここに来てブラスナックルの自我が出始めている。昔やっていた、ナントカセコンド…なんて言いましたっけ？

――60secondsです。選手の皆さん、みんな憶えていないんですよね。

T-Hawk　なんかモテなさそうな大学のサークル名なんて、本人たちでさえ憶えていないでしょう。あの時は、やらされているなあって思っていたんですけど、今は自分がこうやりたいからこうするっていうのが見える。それって大事なことですから。

――凶器攻撃や乱入というやり方に関しては？

T-Hawk　全然いいですよ、ブラスナックルでもなんでも使いなさい。そこじゃないと思っているから。まあ内々ではあるけど、支持はされているじゃないですか。あとはWWEの選手（ジュリア）に噛みついたり、外側にも意識が向いたりしてきた。そういうところは、ちゃんと見ないとね。だから準決勝はブラスナックルJUNがいいですけど、今回のトーナメントはまず、田村ハヤトですよ。

乱発したくない凱旋興行を今年もやる理由…テーマは“つなぐ”

――トーナメントに関してはわかりました。6・4新宿のG-CLASS決勝戦の3日後には、昨年に続く地元・苫小牧（アブロス矢代スポーツセンター）での凱旋興行があります。

T-Hawk　実は今回、やるつもりはなかったんです。前回がすごく大変だったから。去年は15周年ってキリがよかったのもあったので、次は20周年でやりたかったんです。それぐらい乱発したくなかった。でも、前回終わったあとに初めてプロレスを見に来た人が100人近くいたんですけど「プロレスってメチャクチャ面白いですね！　次も絶対に来ます」って、直接言ってくれたんですよ。僕はGLEATが面白かったよりもプロレスが面白かったと言われたことがすごく嬉しかったんです。小学5年生の時にプロレスを初めて見て、その時にプロレスラーがカッコいいと思ったから今もこの仕事を続けていられる。自分でやっていながら、同業のプロレスラーを見てカッコいいと今も思えるし、自分もカッコよく生きないといけないなって思わせてくれる。それと同じ感情を持ってくれたからこそ、面白い、楽しい、カッコいいっていう言葉をもらえたのが嬉しかったんですよね。それで、勢いのまま今回もやることにしたんです。だから6月7日は、また言ってもらいたい。理想はそれがGLEATを見てであればベストだけど、ほかの団体でもいいんです。そういうふうに言ってもらえるプロレスラーの人たちがいた方がいいじゃないですか。

――苫小牧市にやってくる団体も今では限られるでしょうから、生で観戦できるのは年に1、2回です。

T-Hawk　馴染みがない分、大変だし今の時点ですごいプレッシャーなんですよ。でも、大会が終わったあとにそういう声をいただけたら全部チャラになるというか。仮に赤字になっても心は黒字みたいなね。地元だから言うわけじゃないけど、去年で一番嬉しかったかもしれない。そうだ、あの時にGLEATの選手からも「よかったですね」って言われて嬉しかったんだ。それも含めてやってよかったって思えた。もちろん、会社のバックアップありきの話なんですけど、地元でやる意味っていうのは、もはやそこしかないですよね。故郷に帰ってきて、今も元気でやっていますっていうのを見せるのもあるけど…僕はキャリア11年目ぐらいまで、周りのおかげじゃなく自分の努力でやってきたんだって思っていた野郎なんです。性格的に突っ張っていた部分もあったと思うんですけど、この数年でそれって全然違うだろって気づけた。周りの方々が協力し、立ててくれて、その上でその人たちが喜んでくれたら倍嬉しくなるっていうのを経験するようになった。それもあって、今年もやろうと自分がなったんでしょうね。

――今は試合の傍ら、地元に戻って営業回りを？

T-Hawk　はい、僕のやり方はアナログで一軒一軒ポスターを持って回るんです。東京大会や大阪大会でも、来ていただいた知り合いの方にはLINEじゃなく直接お礼を言いにいきます。前にいた団体の社長さんに教えてもらったのが「人は熱量じゃないと動かないから」だったし、それこそ野球部精神じゃないけど直接、ありがとうございましたと伝えなさいという教えが（駒大苫小牧野球部の）監督からもあったし。僕はそういう指導していただいた方には恵まれていたんだと思います。だからポスターを持って一軒ずつ回るのは嫌いじゃない。ぶっちゃけ、プロレスを知らない人がほとんどですよ。でも、ポスターを貼ってください、そしてもしよかったら大会も見に来てくださいって言うことで、つながっていく。僕の個人的な2026年のテーマは“つなぐ”なんで。

――野球部の皆さんは応援に駆けつけるんですか。

T-Hawk　それがね、シーズン直前なんですよ。

――ああ、南北海道予選が始まるのは6月20日ぐらいですもんね。

T-Hawk　前回は5月だったので監督、コーチ、OBがいくって言ってくれて。誰とは言わないですけど、甲子園優勝メンバーも何人か来てくれたんです。体

育会系ならではの「後輩のためなら」っていうので。でも今年は6月だから、夏の甲子園に向けて追い込み期間なんですよね。

――田村選手は4月29日開催なので、前橋育英高校野球部が総出で応援に来るそうです。

T-Hawk　それは時期がよかったですよね。でも、今のプロレス界で地元凱旋興行ができるって、恵まれていると思うんですよね。今回、田村くんと山村もやるじゃないですか。僕の場合は利益を考えたら席数も多くないからそんなには出ないけれど、みんなにも経験してほしいんですよ。一つの大会をおこなうのがどれほど大変なのか。もちろん僕だってゼロから作っているわけじゃないけど、ありがたみというんですかね、俺たちがリングに上がることでどれほどの人たちが動いているかがわかると思うんです。だから、春から夏にかけては田村、山村、T-Hawkってやったけど秋の陣は誰がやるのか。そこに向けてもつなげていきたい。

――そしてそのあとには、7月1日にSGC HALL有明初進出が待っています。

T-Hawk　GLEATって面白いですよねえ。ぶっこみ精神っていうか。鈴木(裕之)社長と昼飯いくと、気合入っているんですよ。正直、たまにこの野郎！って思うこともあるんですけど、ちゃんと受け止めてくれるんですよね。気持ちで殴り合えるんですよ。だから「これにノリたい」って思える。7月1日につなぐためにもトーナメントで優勝して、凱旋興行もいいモノにしないとね。

「G-CLASS 2026」出場選手に訊く ③エル・リンダマン

完全無欠のチャンピオンだとは思っていないので、そこに山があったら登る

5月13日より開幕するGLEATのシングルトーナメント「G-CLASS 2026」エントリー選手インタビューの第3弾は、エル・リンダマンが登場。G-REX王者として優勝が宿命づけられている中、どのような姿勢で臨むのかを訊いたところ、自身と団体に対する俯瞰的な見方が随所に表れた。(聞き手・鈴木健.txt)

僕も河上も五角形グラフの外に強さがある。僕は彼を信じます

――試合の方はすでにおこなわれていますが、G-REX王座という最高峰のシングルのベルトを保持しながら、4・12新宿で田中稔選手のG-RUSH王座挑戦を表明した理由からお聞かせください。

リンダマン　わかりやすくって言うんですかね、陽の目を浴びる人みたいなものはやっぱり必要だと思って。GLEATにおいてベルトを何本も持っている、トーナメントを優勝するという提示の仕方が一番手っ取り早い。ファンの人たちが「この人が一番」というのを軸にする一つの基準点を作りたかったんです。その基準点としての強さ、高さ、深さを出すには、全部のベルトをまとめて獲るのがいいと。

――では、G-RUSHも獲った上でG-CLASSも制覇するという道筋を立てていたんですね。

リンダマン　そうです。

――最高峰のタイトルを保持していれば、ほかのベルトを狙う必要はないと思っていたので、あのアピールには意表を突かれたんです。

リンダマン　G-RUSHに関してはあのルールの中で基本的には若くてスタミナがあって、スピードがある人が有利なタイトルですよね。だから、そういう選手がいくべきだと思っていて。ベテランっていうのはG-RUSHのわかりやすい、速い、スリリングというところでいうとそれは若い人の方が表現しやすいわけじゃないですか。だから、ほぼ最年長者の人が持っている状況っていうのはわかりにくいかなと。G-RUSHというもののわかりやすさですよね。

――それを今の自分なら体現できると。

リンダマン　はい、まだ若いですから。スタミナとか見ればわかってもらえると思いますけど。

――ただ、王座奪取はならないままトーナメントへ臨むことになりました。これもG-REX王者であることを思えば出場することなく、高みの見物を決めようと思えばできる立場だったわけで、チャンピオンでありながらこの中へ入れられたことに関しては、どう受け止めているのでしょうか。

リンダマン　自分は完全無欠のチャンピオンだとは思っていないんで。ただベルトを持っているだけですよね、言ってしまえば。

――そのような自己評価なんですね。

リンダマン　なので、そこに山があったら登るし、強くなろうとする気持ちや勝って積み上げていこう、高くなっていこう、大きくなっていこうっていう気持ちを僕はプロレスラーとして見せたいんで、そこにトーナメントというものがあるのであれば登っていきます。

――チャンピオンとして出場すると、優勝が義務づけられる見方をされます。

リンダマン　そうですね。じゃあここで優勝して、どうやって話が面白く回っていくかってことだと思います。これもわかりやすい形で言うと、チャンピオンがトーナメントで負けて、優勝者が7月1日のビッグマッチで挑戦というのが一番わかりやすい。だからリンダマンが負けることも、わかりやすさでいったら正しいとも言える、団体からしたらね。僕が優勝することで転がりにくくなるというデメリットが生じる。ビッグマッチを前にしてチャレンジャー不在にな

るわけですから。そのデメリットを潰す方法として、やっぱり“外”になってくる。なので、わかりやすさを潰した上での外っていうのも考えられるんじゃないかなと思っています。
――今の時点で、GLEATの外にもアンテナを張っているということですか。
リンダマン　アンテナを張っているとは言わないですけど、どんな選手が来てもその人にとって名前が上がるような試合にする自信はあります。僕は今までもG-REX王者としてDOUKI選手とやったし（2022年8月24日、後楽園ホール）、TJP選手ともやらせてもらいましたけど（2025年12月30日、新宿FACE）、いずれもわかりやすく名前のある選手ではなかったというか、実力はあるけど一歩引いた状況にある人たちだったと思うんです。でもその2試合はいいモノにしたっていう自信があるし、DOUKIさんが上がるきっかけとまでは言わないけど、確実にあそこから上がり目になったと思っていて。TJP選手の場合は、あれ以上の上がり目ってなんだってなるけど、彼は彼で「やっぱりTJPって凄いんだな」ってGLEATで見たお客さんがわかるような試合をやったと思うんです。うん、お互いが上がればいいじゃないですか。それが理想です。だから、自分がトーナメントに優勝して、そういうGLEATの外も視野にいれて7月1日に向かうというのが、一番難しいながらも理想の形。それって、どこかに所属していてもフリーであってもその団体的に実力はあるけれどもっと上げたいと思っている選手をポンって出したら、上げる方も魅力的な団体に映る。それだったら交流しようとか、そういう話になってくると思う。まあ、それはすべて試合を通じてのものですけど、僕は誰かを潰して自分が上がるというのはあまり考えないんで。もちろん、そこに勝ち負けはつきますけどね。
――仮に自分が優勝できなかったら、優勝者と7月1日にやるつもりではいるんですね。
リンダマン　既定路線だと思うし、それを発言するのが優勝者の仕事でしょ。そうなったら、よっぽどのことがない限り受け入れますよ。時期的に見ても7月1日がベストだと思うし。
――トーナメントですが、1回戦の相手である山村武寛選手とは長きにわたる関係性を築いてきています。その選手とこのタイミングで1対1で対戦することに関しては、どうでしょう。
リンダマン　それこそ、実力があるのに上がりきってない最たる例が山村だと思います。外の選手の名前ばかり出して申し訳ないけど、DOUKI選手もTJP選手も対戦した時点で僕より実力があったと思うんです。今回の山村も同じことが言える。僕は、実力がないと思っていますから。
――そんなことはないでしょう。
リンダマン　根性でなんとかしている。実質的なスキルでいったらパワーがメチャクチャ強いわけでもない。言うなれば、力を一番発揮できるようにゲームを持っていくのはうまいかもしれないですけど、強さやスピードで一番かといったら、勝てるところがあまりないんですよ。山村と僕のどっちがスタミナあるかっていったら、僕が一番自信のあるところですら怪しい話です。
――ものすごく俯瞰で見ていますね。以前からそうでしたっけ？
リンダマン　そうですよ。その上で、持っている武器で闘うしかない。普通に考えたら、山村に負けますよ。パラメーターでいったら…五角形のグラフで見比べたら、明らかに向こうの勝ち。
――その前提が自分の中にある状態で闘うと。
リンダマン　パラメーターで勝てるかなと思えるのは…河上ぐらいかな。でも、河上を見てもらったらわかりますけどパラメーター外のところが強いじゃないですか。五角形の外に彼の強さがある。
――不気味ですね。
リンダマン　だから彼の怖さもよくわかります。僕もパラメーター外で結果を引っ張ってきましたから。

――河上選手といえば、2・11後楽園でああいうことがあって、その場ですんなりと受け入れられたんですか。
リンダマン　僕は信じたいッスよね、どんな人でも。だって、信じて裏切られた方が全然いいもん。疑心暗鬼になって、疑いながらつきあっていく方が僕はムダだなって思っちゃうんで。それなら最初からさわらない。僕がさわった時点で一定信じています。
――シチュエーション的に誰よりも先に信じるか否かを判断しなければならなかったじゃないですか。その瞬間の判断で受け入れようとなったわけですか。
リンダマン　はい。過去にどんなことをやっていようとも人は変わりますから。その可能性を否定しちゃったら、生きている意味がないですよ。自分が成長しないって言っているようなもんじゃないですか。それって哀しくないですか？
――哀しいです。
リンダマン　人は変わらないって、あえて言い切っちゃうけど、それでも変わろうとする人の可能性を絶対に否定はしたくない。
――そこまで信じてもらえて、河上選手は嬉しかっただろうなあ。
リンダマン　信じてくれない人もいると思うけど、それは今までやってきたことがあるからなので、頑張ってその人たちを納得させるしかないですよね。
――伊藤選手にはシュークリーム、石田選手にはケーキを振る舞ったのに対し、リンダマン選手には何もやらずとも信じてもらえるなんて…。
リンダマン　僕はむしろ、そういうわかりやすいものには釣られないですから。そういうのに関係なく信じてこそじゃないですか。
――それで1度チームを組んでみて感触は？
リンダマン　息が合っているかはわからないけど、心地はいいです。楽しくプロレスができるから。
――両者とも決勝に上がれば対戦することになります。
リンダマン　明るくなった河上がちゃんとシングル戦線でやるのって今回が初めてなんで、試されるトーナメントになるでしょうから、決勝戦までにシングルの形ができあがっていればいいですよね。それは2月の後楽園でやった河上とは別の河上だと思うんで、その上でもっといいモノを作れる自信がある。

逆をいっていた自分が本流に
闘いを挑んでいかなきゃいけない

――その河上選手がいるブロックは誰が勝ち上がってくると予想しますか。

リンダマン　どうですかね…田村って言うのがいいのかなと思っちゃいますけど。

――いいのかなとは？

リンダマン　元気がよくてわかりやすい。

――それは自分が対戦する上でのいいなのか、それとも見る側の視点でいいなのか。

リンダマン　見る側としてのインパクトがあります。僕の好きなプロレスラーの形だから。大きくて速くて強そうで。

――それだけに、相手にすると大変です。

リンダマン　それは仕方がない。自分の選んだ仕事だから。やれる自信もあるし。

――ブラスナックルJUNはどう映っていますか。

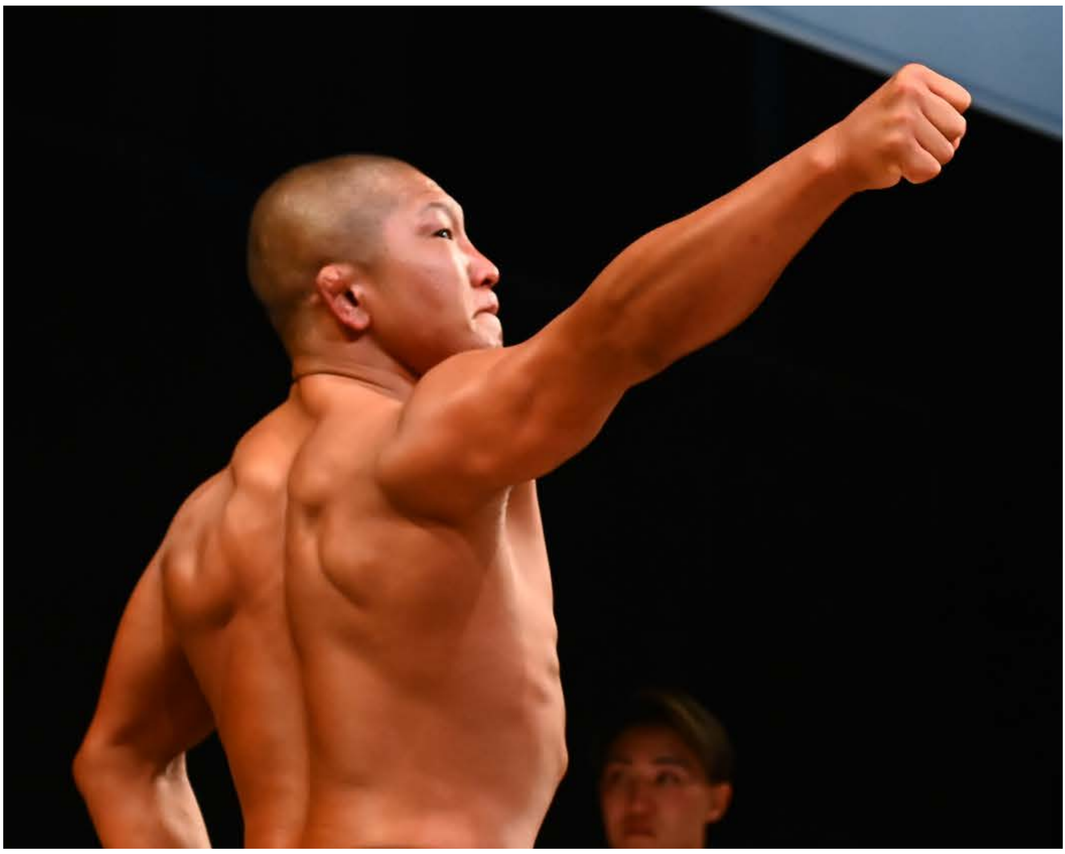
リンダマン　彼は彼で今、楽しくてやっていますけど、それってお客さんに対して、周囲に対して自由にやっているっていう表現ですよね。それを見せるために、いろんなことをすごく考えていると思います。その中で結果もついてきているので、今のところは一応成功していると思うんですけど、いつ崩れるかわからないっていうのは心の奥底にあるんじゃないかって想像しちゃいます。

――崩れるというのは、自分の描いていた通りいかなくなるという意味で？

リンダマン　そうそう。いかなくなった時に、メチャクチャ考えると思います。だから今の時点でも考えてやっている。立場が変わっちゃいましたからね。要はステージチェンジした時に、今までとはやり方を変えなきゃいけない。凶器を使うのも表現方法の一つだから、ルール内でやればいい。ダメだって言われてもやるんだから。

――見る側からすれば誰と誰が当たっても楽しみな８名です。

リンダマン　本当に、いい８人だと思いますよ。誰に対してもやりたいと思えるし、誰とやっても負けるかもしれないって思うから緊張感もある。その中で僕は２つの線があるわけじゃないですか。優勝した場合とできなかった場合の両方で7月1日のタイトルマッチが約束されているようなものだから。実はほかの7人が負けた場合の線がないんですよ。そういう意味でのリスク、緊張

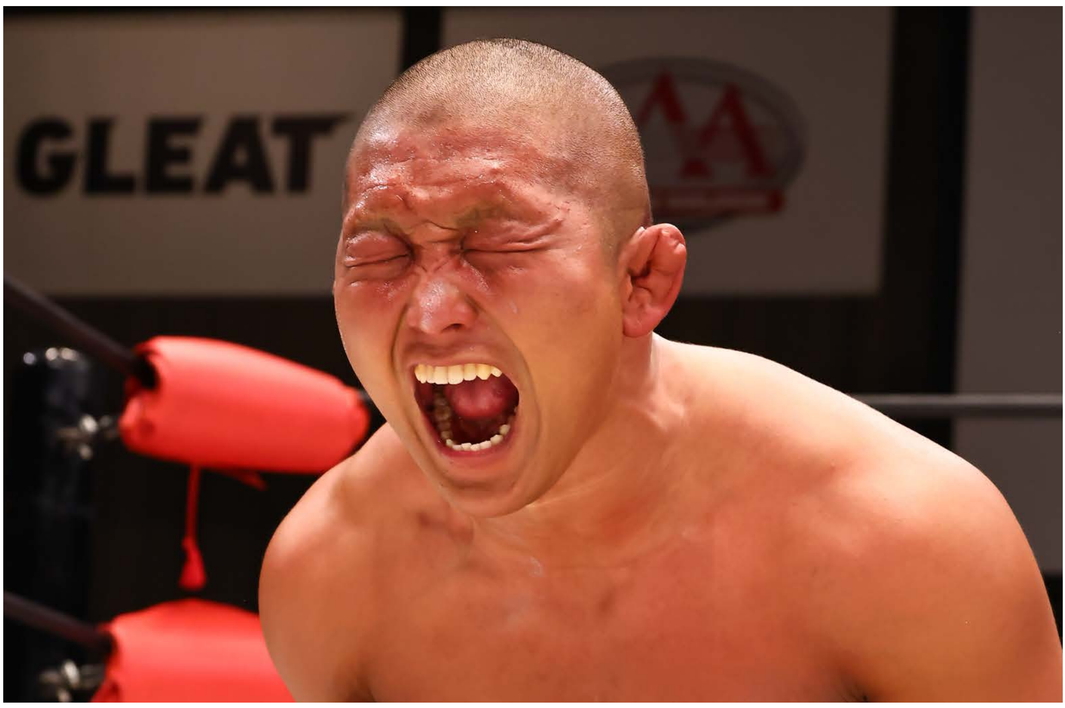


感があるんじゃないですか。
――10月9日に中嶋勝彦選手からG-REX王座を奪回して、半年間保持し続けてきました。その中で見えてきたものはありますか。
リンダマン　いや、そこは2回目なんで大きくは変わらないです。
――立場としては最高峰にいるわけですから、それ相応のものが求められるじゃないですか。そこに応えられているという感触は？
リンダマン　もちろん、応えられていると思います。
――ファンの支持、ありますもんね。
リンダマン　ファンの支持…リンダマンのことを好きか嫌いかっていうのはわからないので、支持を得ているスーパースターみたいな気持ちは自分にないです。ただ、納得はしてくれていると思う。安心感のようなもので存在している気がします。とりあえずリンダマンに任せておけば大丈夫みたいな空気は感じます。
――でも、それこそが信頼されていることなのでは。
リンダマン　花形ではないかもしれないです。
――信頼されるのがマストじゃないですか。
リンダマン　そこは、その人のタイプにもよるんじゃないですか。それを持ち得てはいても、わかりやすいスターであったり花形だったりを獲るためのG-RUSHでもあったんです。だから、これからがリンダマンに足りていない花形、スター、中心とされるものを獲りにいくための闘いです。
――今の自分はスター、中心とは違うという認識なんですね。
リンダマン　そうですね、あえて逆を言っている自覚があるというか、そうやって勝ってきた人間なんで。コスチュームも髪型もそうですけど、みんながそっちにいっているんだったら逆の方が光るでしょっていうやり方で僕はやってきた。自分の思想みたいなものがそもそもみんなとは逆をいっているところも一つの要因ではあるんですけどね。だからこそ、いよいよここから本流にいってスターを目指す人たち、キラキラした人たちの中に正面切って闘いを挑んでいかなきゃいけないっていう怖さはあります。でも、そこを超えたら自分もキラキラできる。
――目指すんですね。
リンダマン　そこから目を背けるのはいけないと思います。
――リンダマン選手は今、自分が団体のエースという認識はされていないのですか。
リンダマン　エースか…みんながどう思っているかですね。自分は、ないです。チャンピオンだけど、エースではない。でもベルトを持つことで象徴にはなれている。エースを獲りにいくために必要なものを獲ろうとはしていますけど、まだ到達はしていない。本当に、はじめの一歩ですよ、まだ。
――7月1日で5周年を迎えるGLEATですが、団体の現状はどのように映っていますか。
リンダマン　普通です。良くも悪くもないです。
――山あり谷ではなく、平坦な感じですか。
リンダマン　山谷があるように見えて、僕にはそう映っていないです。良くも悪くもないからまさに平均値。変化をしていないという点では悪いのかもしれないけど。
――でも、変化は求めていますよね。
リンダマン　向上する上での変化はね。その意味では微増はある。だけど喜べるほどの微増ではない。
――TJP選手とやった昨年末の新宿FACE大会では、熱量が上がったなと感じました。
リンダマン　うん。でも、それも含めての平均値だと思っているので。あれぐらいのものは作れると思っている。成長したから作れたわけでもないし、要は

運とか時勢の範囲内で持っている実力が、上振れることもあるし下振れることもあるにすぎないという感覚です。
――それを飛躍的に上げていくためにするべきことはつかめていますか。
リンダマン　そこは団体としての実力が上がれば上振れの範囲も大きくなりますし、下振れの加減も抑えられる。悪い時でもそんなに悪くないまでにとどめられるんで、本質的に実力をしっかりつけていくことだと思います。

35歳までは可能性がゼロになってもGLEATで続ける

――ただ、旗揚げから5年の時間を費やしてきているだけに、何かしらの形を提示する段階には来ていると思うんです。
リンダマン　形として提示する…たとえば、ほかの団体でいったら何があるんですか。
――例をあげると大会場を満員にするとか、業界的にも大きな話題性であったりとかですかね。
リンダマン　うんうん。結局はGLEATの個性たるものを何か見せろっていうことですよね。それでいうと、大会場満員ってまったく別の話になってくるんです。もちろん目指すべきところではあると思うんですけど、個性をつける、キャラクターづけっていう範囲を超えているんですよ。個性のある団体って、もともと持っていたものとか、長いことかけて作り上げてきたものぐらいしかないんです。
――蓄積ですね。
リンダマン　歴史か、何か瞬発的に運よく持っちゃったもの。話題性なんてそうじゃないですか。何かがハマったとかね。ウナギ・サヤカという人はその話題性っていうのをちゃんと自分のキャラクターにしている。ああいうのは凄いと思います。でもあれは、個でしかできない動き方だし。コンプライアンスとかをある程度遵守しつつも、個人だったら遵守しなくてもいい部分もある。それが団体の場合、大きい会社になるほどそういった個性を作るのが難しくなる。その中で、人それぞれの思想があっていいとは思いますけど、やっぱりベースの部分を上げていくことを、みんなが目指していってほしいですね。それが技術なのか、能力なのか、あるいは集客力なのか、パワー、見た目なのかは各自違うだろうけど。
――個性という点では、GLEATの選手はみんな立っているので、その面白さがもっと伝わらないかというのはこの数ヵ月見続けて思うところなんです。それが内側と外側の熱量の乖離になっている。
リンダマン　だとしたら、伝え方のベースを上げていくのも、これからやって



いかなきゃいけないことの一つです。そこはトレーニングと同列のものです。やったところで、一発で集客につながるかはわからないという意味で。逆にやっていなくても、つながる時はつながっちゃうし。それこそ上振れ下振れでいったら運や景気でポンポンと変わっていくものなので、そこに左右されずに落ち着けって言いたいです。落ち着いて自分を見た時に足りている、足りていないが見えてくる。盛り上がったからOKじゃないんですよ、たまたま盛り上がっただけかもしれないんだから。
――これから先に関し、なんらかの可能性を感じているから続けられているんですよね。
リンダマン　可能性があるから続けているように見えます？　可能性がなかったら、やめていると。
――やめはしないでしょうけど。
リンダマン　でも、続けているってそういうことじゃないですか。
――可能性がなかったら、その可能性を広げるためのことをやり続けるでしょう。
リンダマン　可能性がなかったら、広げられないじゃないですか。
――ゼロではないですよね。
リンダマン　ゼロだったら、やめると思います？
――そういう人もいるとは思います。
リンダマン　僕に訊いているんですよね？
――そうです、だから可能性があるからこそ続けていると見受けられます。
リンダマン　なるほど、なるほど。可能性があるから続けているわけじゃないです。なくても続けますよ。続けて、ここで引退しようと思っています。35歳で引退したいと思っているから可能性がなくても続けて、GLEATで引退します。
――35歳で引退というのは、自分の中で決まっているんですか。
リンダマン　決まっています。まあ、40までもあり得るけど、それはボーナス40であって。何か話が転がって40になることもありますけど、相当考えにくいです。
――着地点が決まっている上で、自分が何をすべきかを考えて今はやっているんですね。
リンダマン　そうです。自分のいい死に方。
――可能性がなくても続けるという姿勢はわかりました。でも、この団体に対しなんらかの可能性は感じているんですよね。
リンダマン　感じています。
――だとしたら広めていかなきゃならんです。
リンダマン　そうッスね。広げなきゃいけない。35歳以後もやる形になって、可能性がなかったらやめなきゃいけないですけど、35歳までは可能性がなかったとしてもやり切ります。
――古い言い方をするとGLEATに骨を埋めるつもりなんですね。
リンダマン　埋めるというか、好きだから。
――今のプロレス界はいくらでも選択肢がある中で、自分の所属している団体に対しちゃんと好きと言えるのは尊いと思います。
リンダマン　それを言うなら、みんな外に出て何がしたいの？って思います。
――人それぞれじゃないですか。
リンダマン　お金ですか？
――それも大きいのが現実でしょう。その中で、団体を応援しているファンが選手から聞きたい言葉は「好き」なんだと思います。だから、その思いがもっとリング上で表現されるとプロレスラーと観客が共有できます。
リンダマン　そうなんですよね。僕、ディズニーランドが好きだし、いろんなことに興味があるから落語が面白そうだと思ったらいくようにしているんですけど、ディズニーランドにいっても「うーん、いいなあ」っていうテンションなん

ですよ。
――しみじみ味わってしまう。
リンダマン　それが人から見ると楽しそうに見えない。おまえといくと面白くないよって言われる。そうじゃねえんだけどなあ…って思うんですけど。リング上は、楽しいって言っているだけが楽しいじゃない。お客さんが手拍子しているから盛り上がっているわけじゃないと思っていて、僕は手拍子ってマトモに受けちゃいけないもんだと思うんですよ。
――むしろ一人ひとりバラバラの方が真の感情が伝わりますよね。
リンダマン　そうそう。僕はシンドそうな顔はしていますけど、シンドいことが楽しいと思ってやっているんで、そういうふうに見てほしいです。リンダマンはベース楽しそうで、好きでやっている。だからやめていない。いろんなことを考えてもらっていいんですよ、娯楽なんだから。じっくり考えてみるのも、ライトに楽しむのもありなのが本来なんだろうけど、僕個人はじっくりと考えながら見てくれると嬉しいです。自分が若い時、そうやってプロレスを見ていましたから。
――エル・リンダマンをじっくりと味わう。
リンダマン　ただ、スターってもうちょっとライトに味がするものだから、そこからも脱却していかなければならないのかもしれないんだろうけど。なので、コンビニで目につきやすいパッケージデザインから入ります。

「G-CLASS 2026」出場選手に訊く ④山村武寛

僕がプロレスラーに戻るべきであるなら神様が導いてくれると思っていました

5月13日より開幕するGLEATのシングルトーナメント「G-CLASS 2026」エントリー選手インタビューの第４弾は、山村武寛が登場。伊藤貴則や渡辺壮馬という今年に入ってシングルタイトルを獲得した人間を差し置いてのトーナメント出場は、それほど会社の期待がかけられているという証拠。８名の選ばれし者たちの中に入ったことを本人はどう受け取っているかから、取材は始まった。（聞き手・鈴木健.txt）

体を張ってやっているからにはシングルの一番を味わってみたい

――まず、昨年以上にエントリー選手が厳選された中へ自分が入ったことに関しては、どのように受け止めていますか。

山村　ハッキリ言うと今も自信しかないんで、入って当然だろうという気持ちです。入れてよかったっていうのはないッスね。今のGLEATベストメンバーだと思うんで、その中で1位を獲りにいくための場という位置づけです。

――そう思えるほど、今の自分はノッていると。

山村　ええ。特に今年に入ってからはルイージ・プリモ、ジャック・カートウィールというクセ者的な外国人とシングルでやって勝っているし、3月の配信マッチでも井土徹也に勝って、タイトルマッチとかではないですけどシングルマッチでは負けなしなので、そこは実績を積んできていると思っています。

――その好調ぶりは何によるものなんでしょう。

山村　気の持ち方が一番大きいです。今年に入ってから特に1位を獲りたいという思いが大きくなって、それを目標にしてリングに上がった結果、変わってきたんだと思います。去年の2月に石田凱士のG-REX王座に挑戦したんです

けど、そのチャンスを逃してしまった。でも、2023年12月に長期欠場から復帰して現在にいたるまで大きなケガをすることなくやってこられているのも自信の一つになっているんです。首のケガが再発しないことを第一の目標としてやってきた中で、じゃあ次に目指すのは何かと考えた時に、そこはやっぱり一番を獲りたいっていうのが頭をもたげてきたんですね。

――復帰からの約2年間はケガなくやれるかどうかの確認期間でもあったんですね。

山村　そうです。去年、両ヒザの内側ジン帯断裂はしたんですけど、その段階でスターダスト・プレスをはじめとする飛び技以外で、自分の中で3つ獲れる（ピンフォール）技、ギブアップを獲れる技をいろいろ考えてやってきて、ようやく形になってきた。それを経ての今年なので、G-CLASSはタイミング的にこれ以上ない場ですよね。

――山村選手は#STRONGHEARTSとして、GLEATの一員として、あるいは鬼塚一聖選手とのタッグとしてというように、ユニットや組織、チームの中で自分がどうするかというのを続けてきた選手だったので、一番を獲りたいという言葉が新鮮な気がします。

山村　タッグで一番になったことは鬼塚がパートナーの時にあったんですけど、プロレス人生においてシングルで一番になったことは今までないんで。シングルのベルトもまだ未体験だし、トーナメントやリーグ戦といったもので優勝を味わったこともない。体を張ってやっているからにはそういうのを経験してみたい。その上で、トーナメントっていうのはタイトル以上にわかりやすく一番が決められる。一発のタイトルマッチではなく、勝ち抜くことで決められる一番ですから。しかも、このベストメンバーだから優勝したら誰も異論はないでしょう。

――しかも1回戦の相手がG-REX王者ですから、勝てばチャンピオンを破ったという実績も付随してきます。

山村　エル・リンダマンを見てきた自分としては正直、最近パッとしないです。

悩んでいるようにも映るし、チャンピオンらしくもない。何を抱えているのかはわからないけど、あの弾けているリンダマンとは違う状態に感じます。去年までは団体のトップとして引っ張っていくという気概が見えたんですけど、今年に入ってからチャンピオンとして突出した存在ではなくGLEATの一部になっている。それが僕の印象です。同じチームになったら、そこは尊敬できるパートナーですけど、対角線に立ったらそういうイメージの方が強く出ると思うので、今の僕ならたとえ向こうがチャンピオンベルトを持っているとしても精神状態で上回れると思うし。

――調べてみると、DRAGONGATE時代は正式デビューの前後でエキシビションマッチを5度やって3敗2分（5分ドロー）、本戦では反則勝ち（セコンド乱入）で1勝をあげていますが、1敗1分（5分ドロー）となっています。そしてGLEATでは昨年1月24日のG-RUSHトーナメント準決勝で敗れており、ちゃんとした形では今のところ未勝利です。

山村　反則勝ちあげているんですか？　いやあ、まったく記憶にないですね。G-RUSHの時はツーカウントルールでは引き分けて、そのあとのワンカウントルールで負けている。純然たるシングルマッチで、しっかりとした決着はまだないんですよね。だから、過去の戦績はまったく関係ないです。お互いの今で勝負した結果、僕が勝つ。今の僕は、発する言葉の強みでいこうと思っているので、そこはハッキリ言います。リンダマンに限らず、今回のトーナメントは借りを返したい相手ばかりなんですよね。その中でも同い年の田村ハヤトは一番意識します。30歳同士で決勝戦をやりたいなと。去年までは鬼塚と島谷（NOBU SAN／学年が同じ）もいましたけど、その2人がいなくなった今は田村ハヤトとの間で一番を決めたい。

――その前に準決勝で石田vsKAZMA戦の勝者と当たることになります。

山村　どっちが勝ち上がってきても、難敵です。石田は復帰戦の相手であり、G-REXに挑戦した時のチャンピオンでもあってどちらも負けているから借りがありますし、これも同い年なんですけど先を進んでいると思うので、絶好のタイミングではあると思います。ただ、KAZMAとはシングルでやったことがないから、その点で興味がある。そういう意味では、誰とやっても楽しみな部分を持てるというのは、闘う上で大きな武器になるんじゃないかって思います。これも復帰してから今までは、プロレスを楽しめるようになるための準備期間だったんでしょうね。

遊び心を持った方が自分自身も楽しんでプロレスをできる

――8選手の中では、山村選手が優勝を果たせばもっともガラッと勢力分布図を変えるものになると思います。それほどGLEAT全体に影響を及ぼす。

山村　それも含めての、一番のタイミングなんですよ。本当に、今しかないって自分に言い聞かせています。今年に入ってシングルで負けなしって言いましたけど、それ以外のものも揃ったので。

――それ以外のものとは？

山村　経験値であったり、内容の濃さ、ふり幅の広さであったり、戦績とは別のところでの手応えですね。今思うと、プリモやカートウィールのようなクセのある相手とやったことで経験値を上げられたと思うし、幅も広がった。まさか、ちゃんこシェフになるとは思っていなかったので。

――思っていなかったんですか。

山村　ピザ職人に対して普通に試合をしてもよかったんですけど、それで勝ったとしても飲み込まれる…存在感で上回られてしまう気がして、自分も何かしないといけないと思った時、過去にちゃんこイベントを何回かやっていたんで「ここはちゃんこだ！」ってひらめきまして。

――あれは当日、試合会場で作ったんですか。

山村　昆布出汁を仕込んでいました。練習生時代に、昆布は必須だと教えられていたので。

――でも、あれはプリモのピザのように試合では使いようがないですよね。実際、体の一部とは見なされず、なんの役にも立ちませんでした。

山村　でもちゃんこシェフの格好のまま闘いましたから、むしろその方が重要でした。カートウィール戦でも向こうがザ・アメリカのような選手だから超・和で対抗するべく羽織袴を着て入場しましたし。

――あれは似合っていましたよ。

山村　闘いとは直結しない部分でも、楽しさを求めて工夫するようになりました。

――どちらかというとこれまでは、一本気なカラーでしたよね。

山村　そうでした。でも、遊び心も必要だなと気づいて。その方が、自分自身も楽しんでできるじゃないですか。ケガから復帰した時は、それだけでいっぱいいっぱいだったのが、いい意味で余裕が出てきてそういうところまで頭がいくようになった。なので、これからもいろんな工夫を見せるので楽しみにしていてください。

――境遇的に何度となく大変なことがあったからこそ、そこから脱却してプロレスを楽しめるようになったのは、何ものにも代え難いと思います。

山村　ここまで来ると、好きで始めたプロレスなんだから、好きなことをするならちょっとぐらい辛いことも辛いと思わずにやるのが当たり前だと思っています。だからこその、今なんですよ。

――山村選手は頸椎のケガによりデビュー後２年目の2017年10月から2018年12月まで欠場しながらカムバックしたにもかかわらず、2019年４月に再び首の負傷で４年８ヵ月間もリングを離れました。私はあの日、WRESTLE-1後楽園大会の現場にいたので（試合中に山村が動けなくなる）、こうして普通にプロレスをやれるようになった姿を見て本当によかったと思えるんです。そして、よくぞ諦めなかったなと。

山村　ありがとうございます。もちろんマイナス思考になったり、引きこもりのようになったりしたこともあったんですけど、首をケガしたあとに何かの本で、僕がプロレスラーに戻るべきであるならやることさえやっていれば、あとは神様がその方向に導いてくれるというような文言を読んだんです。どんなに時間がかかっても、そのゴールは待っているから、あとはそのゴールに到達する

ためにやるべきことを積み重ねるだけだって。だから長くリングを離れていてもその間は戻れると信じて休んでいました。

――頭ではそのように解釈しても、気持ちがついてこないケースもあり得るじゃないですか。

山村　その文章に巡り合っていなかったらそうなったかもしれないです。その意味では、運よくそれを読むことができたんでしょうね。

――今は首に関する不安は？

山村　問題ないです。第1頸椎を留める手術をしたんでそんなに稼働域は広くないんですけど、試合をしてみてまったく支障をきたしたことがないんで、やっていける自信になっています。

――先日、同じ箇所が原因でDDTの樋口和貞選手が引退という決断をしました。

山村　まさに同じところだけに、いろいろ思うところはあります。やめざるを得なかった人の今後について、あとはケガで悩んでいる人、シンドい思いをしている人の希望になりたいんですよね。

――よい方向にいけた事例として。

山村　はい。本当、そう思います。

不良が普通に授業を受けるだけで評価されるのはおかしいんですよ

――ところで、山村選手の凱旋興行はG-CLASS開催中（5月30日）に組まれています。

山村　凱旋興行の方が先に日程決まっていたんです。あとでG-CLASSが発表されて、これはヤバいなと。5月に入ってから宣伝活動をしている場合じゃなくなりました。G-CLASSに全集中したいですから。それで4月中に凱旋興行に関してはやるべきことを全部やって、ケリをつけた上で5月に臨めるようにしたんです。

――実際、4月で前売り券が完売したんですよね。その分、大変だったのでは？

山村　此花区のいろんなところにポスターを貼ってもらいました。DRAGONGATEの時に1度凱旋興行をやったんですけど舞洲アリーナのサブアリーナだったんです。でも、そこはバスケットボールチームのエヴェッサの持ち物になったんで、開催できなくなって。それで此花区内でできるところと

いったら一休ホールがあるので、今回はそこで。
――小さい頃から知っている会場なんですか。
山村　そうです。保育園の時はお遊戯会の会場になりましたし、成人式の会場でもあったので馴染みが深い場所なんです。
――まさに山村武寛史においてともに歩んできたかのごとく。そこでプロレスの試合はやったことがあるんですか。
山村　大阪プロレスの大会で1度ありました。此花区自体、それほどプロレスがおこなわれる街ではないんで。でも、JR西九条駅から歩いていけますし、もっと近くには阪神千鳥橋駅もある。なんばからも梅田からも一本だから交通の便がいいんですよ。此花散策もかねて来てもらえるという。
――桜宮高校野球部関係で協力はしてもらっているんですか。
山村　まったくないです。桜宮は都島区にあるから、此花からはちょっと離れているので。だから、此花時代の同級生にいろいろと宣伝してもらっています。
――GLEATは梅田のステラホールや、先日は扇町で大阪大会をやっていますが、それとは一味違った此花ならではのものを見せるつもりでいるんですか。
山村　いや、そこはむしろ通常のGLEATを見せたいという思いですね。特別なことよりも、GLEATそのものを見てもらって、面白いと思ってほしい。通常の大阪大会以上に見たことがない人が大半だと思うので、僕の凱旋きっかけで普段着のGLEATにハマってほしいです。そこでGLEATを好きになってくれた人たちのために年に一度はやりたいと思っているし。だから自分のためというよりもGLEATを知ってもらうためのきっかけとしての此花大会ですね。
――わかりました。あと聞いておきたいのが、河上隆一選手のことは信じていますか。
山村　……(長考)。
――停まりましたね。
山村　……7割。
――あとの3割は？
山村　なんか不気味。7割信じてはいますけど、急にあんなお花畑になれるのかなって、考えが及ばない部分があるので、それが3割ですね。100%信じるには、まだ時間がかかります。
――そうですか。比較的スムーズに組んでいるように見えたので。

山村　すんなり組んではいますけど、全部信用しきっているわけではないです。ただ、うまくいった時の爆発力はすごいと思いました。まだ1回ぐらいしか組んでいないので、このまま回を重ねれば100%に近づいていくのかもしれません。去年までやられたいろいろなことに関しては、わりとスッキリしています。ただ、これは自分以外の人も含めてなんですけど、みんな騙されているというか…河上隆一って、学校における不良と一緒なんですよ。今までさんざん悪いことをしてきたやつほど、普通に授業を受けるだけで評価されたりいい子になったって見られたりするじゃないですか。あれって、本来はおかしいんですよね。

――当たり前のことをやっているにすぎないのに賞賛されるという。

山村　本当は授業を受けた上で、テストでいい点を取らないとそれまでにやってきたことは埋められないはずなんですよ。そんな授業を受けただけで褒められるんだったら、それまで真面目にやってきた生徒はどうなるんだっていう話じゃないですか。河上隆一も、それまでやってきたことがヒドすぎたんで、その反動でなんかいい人に見られている。そこは周りも間違ってはいけないと思うんです。

――ファンもそんな感じですね。

山村　まあ、気をつけるに越したことはないんで。ちゃんとあとの見えない3割を忘れることなく組む時は組みます。

「G-CLASS 2026」出場選手に訊く ⑤石田凱士

GLEATの所属全員が「シングルは石田が一番」と思っていなければ嘘です

5月13日より開幕するGLEATのシングルトーナメント「G-CLASS 2026」エントリー選手インタビューの第5弾は、石田凱士が登場。昨年はG-REX王者としてエントリーされながらよもやの1回戦敗退となったが、今年はシングルマッチの機会がなかった分、溜まっているものを一気に放出するような闘いをすると宣言。そして、B.G.I.対決となる1回戦の相手・KAZMA SAKAMOTOに対し、ある呼びかけをした。(聞き手・鈴木健.txt)

KAZMAさん、ガッチリとストレート勝負でやりましょう

――昨年のG-CLASSは相手がエル・リンダマンだったとはいえ、1回戦負けでした。

石田　G-REXチャンピオンとして出場しながらの初戦負けでしたからね。リンダマンにはそのあとすぐ、G-CLASSの決勝戦がおこなわれた日にベルトを懸けて勝っているんで、今年は逆にベルトを持っているリンダマンに勝てば実質、挑戦権ゲットですから。その上で優勝するのが一番きれいに去年の借りを返す形になるでしょう。

――そこまで具体的に描いていると。

石田　もう、僕の中ではできています。去年に関しては心の余裕がありすぎたっていうのはありましたね。1月に獲って2月、4月と順調に防衛を重ねての出場だったんで、まあ負けないだろうっていうのでやったら足元をすくわれた。それに対し今回は、この数ヵ月ってほとんどシングルをやっていないんですよ。12月にG-INFINITYを獲ってからはKAZMAさんとのタッグ、あるいはBLACK GENERATION INTERNATIONALとしてのタッグや6人タッグば

かりなんで。でも前回のインタビューでも言った通り僕は基本、シングルプレイヤーですから。2026年は5月に来てやっとシングルで見せられる場が来たなと、気持ちはノッています。

――そこは自分の中でしっかりとシフトチェンジできるものなんですか。

石田　まったく問題ないです。タッグに関してもシングルと同じように自由にやっているのを、KAZMAさんが補正してタッグチームにしてくれているイメージなんで。それがシングルになったら、自分のやりたいことを本当に止める人がいなくなって、100%解き放たれる。ほかの出場者はどう思っているかわからんけど、GLEATにおけるシングルのナンバーワンは僕じゃないと嘘ですから。それは内容しかり、結果しかり、GLEATの所属全員が思っていることですよ。仮に僕以外の人間がトーナメントで優勝しても、自信満々に「俺が1番だ！」って言えるかというところに疑問があります。

――自分だけでなく、ほかの選手も「石田がシングルプレイヤーとしてはナンバーワンだ」と思っている確証があるのですか。

石田　あります。ていうか、そう思っていなかったら「あなたはちゃんと試合を見ているんですか？」って言いたいですよ。自分のことではありますけど、客観的判断によってそういう結論を出しているんで。同じように、客観的にGLEATの試合を見ている人間であれば「石田さんの試合、やべえな」ってなりますよ。

――それを口にしないということは…。

石田　隠しているのか、それとも見ないようにしているかのどちらかですね。

――ただ、1回戦の相手は石田凱士を見ないわけにはいかないポジションのKAZMA選手です。

石田　KAZMAさんとのシングルは…2回目になるのかな（2023年3月21日、大阪。石田のG-REX王座にKAZMAが挑戦）。

――記録を調べたところ、前の団体で1度やっていました（2019年8月11日、名古屋）。その時はKAZMA選手がハーフ・パッケージドライバーで勝っているので、通算戦績は1勝1敗になります。

石田　ホンマですか!?　まったく憶えていないですわ。2019年ということは…キャリア4年ぐらいですか。憶えていないんで、それはなかったことにしましょ。前回のタイトルを懸けてやった時は、KAZMAさんが負けはしましたけどけっこう自信を持ったと思うんですよ。今までやってきたシングルマッチの中でも、トップに入る内容、手応えだったんじゃないかと。それは僕も同じで、今回の1回戦があれを超えられるのかどうかっていうぐらいの試合だったんです。でも、やるからにはお客さんの熱が一番熱い新宿FACEで超える試合をできたらなって思うし、因縁のようなものもないんで。この日ばかりはタッグパートナーではなくなるけれど、そういうのを抜きにしてお互いのプロレス観をぶつけ合えたら、いい化学反応が生まれる気がします。

――当時のKAZMA選手はBULK ORCHESTRAとして対戦したので、今回は関係性が違ってきます。

石田　より近い距離感の中でやるわけだから、手の内は割れていますし。あの時は、僕がGLEATに来て半年ぐらいしか経っていなかったんで、KAZMAさんとは2、3年会っていない状況でのシングルマッチだったんです。向き合い方に関しては、今回の方が難しいでしょうね。ただ、僕は直球勝負しかできないタイプなんで。KAZMAさんはいろいろ裏をかいてくるタイプですけど、この試合だけは裏をかいてほしくないですね。僕とKAZMAさんだからこそ、ストレートな気持ちでぶつかり合う試合をしたいって伝えてください。

――確かに、直球一本で来るKAZMA SAKAMOTOというのは印象がないです。

石田　BULKの頃はけっこう直球で来たんですよ。僕のスタイルに合わせたのかどうかはわからないけど、いい意味でも悪い意味でもKAZMA SAKAMOTOっぽくない試合というか。うまさを出すんじゃなく、強さを出そうとしていたのかなと今にして思うんですけど。そういうのを、このタイミングでやりたいんですよね。

――GLEATに来る以前からKAZMA選手は灰汁の強さで相手を飲み込んでしまうタイプでした。ここで言う灰汁とはズルさや嫌らしさ、エグさといったところを指すわけですが。

石田　MAZADAさんに似ていますよね。何をしているわけでもないのに、空気から何からすべてを持っていってしまう。もちろんそれがプロレスラーとしての強みであり、うまさであるのは承知していますけど、僕に対してはその部分で勝負してほしくない。存在感で上回るとか、勝敗を抜きにして俺が持って

いったぜ！とかじゃなく、勝ち負けだけをお互い見て闘いましょうよ。
――この呼びかけを、本番前に出していいんですね。
石田　いいです。プロレスラーはただでさえ一番になりたいと思うし、実際にトーナメントだからその一番を決める場なんだけど、この1回戦に限ってはそういうものさえも出さずにお互いの気持ちのぶつけ合いをKAZMAさんとやってみたいんで。
――このあと、KAZMA選手にもインタビューするので、お伝えします。その上で、応えてくれるかどうか…。
石田　いやいや、これ応えなかったらだいぶしょっぱいですよ。いつものテを使って勝ったところで嬉しいですか？って。後輩がここまで熱くストレートに言っているんですよ!?　それの裏をかいて勝つのは大人じゃないですね。
――見る側としては、2・11後楽園でやったBLACK GENERATION INTERNATIONAL同士のG-INFINITY戦（石田&KAZMAvsARASHI&JDリー）のような試合がシングルでも見られればという期待があります。
石田　いやあ、あれはホンマにあの日の中で一番気持ち対気持ちでできた試合だったと思います。同じユニット同士で、こんなにやり合うんだ!?っていうぐらいのモノを見せて、無意識のうちに拍手しているような爽快感をお客さんに与えられるB.G.I.対決がシングルでもできたら、僕は一番の理想です。それは僕だけの願望ではなく、お客さんも求めているはずです。
――そう思います。
石田　だからこそKAZMAさん、ガッチリとストレート勝負でやりましょう。

誰と誰が当たっても意味のあるカード
それが今回選ばれた8人の理由

――その上で、準決勝でG-REX王者とやると。
石田　去年のトーナメントからタイトルマッチの流れと同じ形でひっくり返すには、リンダマンに勝ち上がってきてもらわないと。それで勝ったら誰も文句言えないじゃないですか。ただ、仮に山村が上がってきたとしても楽しみなんですよね。去年の2月にやった時は、僕と山村の関係があるから（DRAGONGATE時代からの同期）タイトルマッチに漕ぎつけましたっていう感じで実現したから、逆に僕の方はMAXで楽しめなかったんですよ。KAZMAさんとやった時とか、T-Hawk、リンダマン、壮馬とやった時は試合前から湧き出るものが溢れていたんですけど、山村とのタイトルマッチだけは本当にこのタイミングで彼とでよかったのかなっていう気持ちが僕の中にあったんです。かといって、その前に負けたから受けるしかない状況で。
――気運を感じなかったんですね。
石田　でも、今の山村だったらこの1年間見ている分ではやっと試合慣れしてきた感がある。周りの目を気にすることなく自分を出せるようになってきていると思っているんで、その山村とならシングルでやりたいっていう気持ちもあります。
――山村選手は周りの目を気にしているように見えましたか。
石田　全部合わせると6年ぐらいは欠場していたと思うんですけど、復帰戦を僕とやった時は本当に必死に、どう見られているかなんて考えることなくプロレスに戻って来られたという思いのみでやっていた。それが試合数をこなしていくうちに、自分がどう見られているか評価も気になってくる。当然といったら当然なんだけど、それによって試合に集中しきれていないなっていうのが見えたんです。そんな感じだと、僕の方も山村に対し気持ちが入らない。だけど今の山村は周りがどう見ようとも、俺はこれがやりたいんだ！っていうのをしっかり出せているように映る。あいつとは、ちゃんとした舞台でやりたいんですよ。それは会場がどうとかではなく、しかるべきタイミングでという意味でね。ましてやチャンピオンのリンダマンに勝って上がってきたら、確実に前回と

はまったく違う闘いになりますから。

――一方のリンダマン選手はどう映っているんですか。

石田　今のリンダマンですか…GLEATで何度もシングルやってきましたけど、今は中からにじみ出る覇気がなくなってきているように見えます。チャンピオンなんだから強いのはわかるんですけど、以前のリンダマンは中からも外からも元気を出しているイメージだったんです。今はなんていうか、あの時のリンダマンを崩してはいけないと思って元気を出しているから、内側から発せされる元気が出ていない。試合を見ていて、そんな感じがするんです。リンダマンと山村に関しては、逆になった感ですね。昔は山村の方が芯からの熱を感じられなかったのが、今はリンダマンの芯の熱が伝わってこない。

――それでも順調に防衛を重ねています。

石田　だからそれは、強いからなんですよ。強さはある。ただ、心の熱が伝わってこない。それがなんでなのかはわからないですけど。

――そういうのは受け取る側の感覚なので、石田選手の中ではそれが真実なのでしょう。

石田　だから、リンダマンが違うと言うならそれをぶつけてきてくれればいいんですよ。メチャクチャ燃えて、芯からの熱を出してくれたら嬉しい。

――一方、反対ブロックですが。

石田　今回はどちらのブロックも…というか、全員誰と誰が当たっても意味のあるカードになりますよね。それが今回選ばれた8人の理由なんじゃないですか。全員分の関係性があるというか。その意味では、河上くんとJUNの物語を見てきているからみんなが注目していると思うんですけど、僕はT-Hawkとハヤトの方が気になります。あの2人がタッグを組んだのも、どこかでシングルマッチをやるために組んでいたんじゃないかって思うぐらいで。やたら田村くんが張られて痛がって、だけどチームとしては安定して強いというストーリーが描かれているじゃないですか。もしもあの二人が組まずにポンと1回戦で当たったら、今ほど注目されていないと思うんです。

――それは言えますね。
石田　あの二人の間では、タッグを組んだまま1対1で闘うイメージができていたと思うんですよね。これは純粋に、プレイヤー目線で楽しみです。どっちが勝って、決勝で自分と当たるかとか抜きにして見たいカードだなって。
――とはいえ、自分が優勝するには４人の中の誰かと決勝戦を闘わなければなりません。
石田　僕のイメージでは、Tか田村の勝った方が決勝に来ると思います。それは、どちらが勝ってもシングルの強さがある。シングルマッチって、ごまかせないじゃないですか。タッグは、いい意味でも悪い意味でもタッグパートナーがいるからごまかせたり、なんとかできたりするんですけど、シングルは自分の力だけでどうにかしなければならない。田村くんとT-Hawkって、そこの強さを持っている。今の河上くんとJUNに関しては、そこが見えないんで。
――河上選手はシャーマン以後のシングルマッチは皆無ですし、ブラスナックル選手は介入込みなのでこちらはシングルプレイヤーとしての真価がつかみきれません。
石田　シングルの強さ云々を抜いた話をすると、この前の（４・８）新宿でJUNと対戦した時に、ヴィジュアルがメッチャよくなっていると思ったんです。それまではトサカ頭、革ジャン、サングラス…誰かにやらされているんちゃうか？って思うぐらい着飾れていないというか、キャラ作りのために頑張っているようにしか見えなくて浮いている感があったんですけど、新宿ではそれがハマったのか、自分がファンだったら好きになってグッズを買っているんじゃないかっていうぐらいの印象を持ったんです。
――ブラスナックルJUNのファンになる！
石田　ということは、あとは強さを出せればバン！と跳ねる。そういう期待感はありました。ただ、試合は強くないんで。いろいろ（凶器を）使っているじゃないですか。あれを使い続けるのかどうかはわからないですけど、それ以外のところでもう一つ何かをつかめば、あれは人気出ますよ。

――反体制で悪いことばかりやっていても人気出ますかね。
石田　いやいや、プロレスファンはそんなところで判断しないですから。河上くんが裏切られて、それによって主役に躍り出るかと思いきや、実はJUNが主役になるための流れなんじゃないかって受け取るファンもいるだろうし、僕もそっちなんじゃないかっていう気がしています。まあ、あとは軍団のまとめ方ですよね。今、まったくまとまっていないんで。
――本人はリーダーという意識がビター文ないらしいです。ユニットのメンバーも勝手についてきているだけで、金魚のフンだと。

石田　あー、そうなんスか。じゃあ、あれはあれで正解なんですね。そのわりには新ユニット名を発表する時、これ見よがしに同じTシャツ着てきたのは、何なんですかね。まあ、最終目的が全員一致しているのであれば、もっとスムーズにチームとして動くんでしょうけど、現時点ではまったくB.G.I.の敵ではないですね。

――まあ、実績的にもそうなりますよね。

石田　B.G.I.って、本当にみんなが凄すぎますよ。2・11後楽園のG-INFINITYタイトルマッチの前哨戦で、B.G.I.同士の6人タッグマッチをやったんです（2・4配信マッチ。石田＆KAZMA＆ブラック・アンドロメダvsARASHI＆JDリー＆渡辺壮馬）。そこで確信したのは、B.G.I.のチーム力は当然として、それ以上の個々の強さ。そうか、だからチームがよく見えるんだっていうことに気づきました。そこは運に恵まれたなというありがたみもあります。海外から来るやつもみんな自分のキャラクターを持っていて、試合でそれを見せられる実力を備えている。だから、僕ら以上のユニットは当分…まあ、あと2、3年は出てこないでしょうね。

河上くんは一人の方がいい
B.G.I.入り？絶対に×4ない

――ただ、この前のキャプテンフォールマッチでTheSickに勝てなかったという事実はあります。B.G.I.のメンバーがキャプテンではなかったとはいえ。

石田　そうなんですよねえ。でもあれは河上キャプテンが悪い。だって、自分でキャプテンになりたいって、あれほど言っていながらキャプテンフォールマッチのルールを知らなかったんですよ!?

――あれは衝撃的でした。あまりの？？？に若干、客席も引いていたほどでした。

石田　あれは子どもの発想ですよ。それがなんなのかもわからず、名乗れるというだけでなりたいって駄々をこねているような。

――なんのヴィジョンもなく学級委員長になりたがるような。

石田　それですよ！そんなんで、勝てるわけがないじゃないですか。だから、TheSickに関しては河上くんにお任せします。好きにやってもらって、僕はタッグタイトルも持っているし、このトーナメントもあるから、それが終わったあたりでTheSickのチーム力が上がっていれば河上くん抜きでガッチリやりたいですね。

――キャプテン・リーダーなしで。

石田　これからも一人でキャプテンを名乗り続けていいから。あとは頼んだぞ！ですよ。あ、JUNのことで一つ思い出した。反GLE MONSTERSの時、僕の試合の時だけやたら乱入してきたんですよ。僕らのチームが負けて、それを見て「へへへ」ってあざ笑うっていうのが2、3回続いたあと、アゴを骨折して休んで。それで戻ってきたからまた狙ってくるのかなと思ったら、河上くんを裏切ってそっちの方にいっちゃったじゃないですか。こっちはやられっ放しのまま回収していないんですよ。誰も憶えていないでしょ？

――私も言われるまでは、まったく。

石田　それはそうですよ、なんの結末もなかったんだから。事を荒らすだけ荒らして、ケツも拭かずに河上くんに向かっていったのは腹が立ちますよ。ストーリーを進められずに置いてきぼりを食らったこっちの立場はどうしてくれるんやって。

――先ほどまでファンになりそうと言っていたのが…。

石田　いや、ならんです。逆に、このトーナメント中もこっちから襲いにいくかもしれないから気をつけておけと。

――いつもは乱入している自分がいきなり乱入されたら、ブラスナックル選手も慌てるでしょうね。

石田　ああいうのはよくないですよ。ファンも「あれ、どうなったの？」って困惑するじゃないですか。おまえが始めた物語だろってやつですよ。
――それで、今後も河上選手が共闘を呼びかけてきたらどうするんですか。
石田　組みません。新宿もバックステージで正式に断りましたから。お疲れ様でした。あんなの組めないですよ。河上くんはね、一人の方がいいと思うんです。今までも、誰ともうまくいっていないじゃないですか。ユニットでリーダーになるたび、最終的にはみんな離れていく。
――おっしゃる通りです。
石田　BULKも、河上くんが会社をクビになっていなくなってからの方がよかったという説もありましたから。つまりはそういうことですよ。
――でも、断ろうと思えば断れたはずなのに一度は組んだじゃないですか。
石田　それは二人で話した時にJUNに対する腹立たしさが一緒だったんです。だったらキャプテンフォールで当たればJUNだけを狙えるわけじゃないですか。
――向こうのキャプテンはブラスナックル選手しか考えられなかったですからね。
石田　これ、メッチャいい機会やん！と思って、じゃあやりましょうってなったんです。別に自分がキャプテンにならなくてもJUNを狙えるんだから、河上くんの好きにしていいよっていう感じで。ところが…まさかルールを知らなかったとは、ちょっと想定できなかったですね。あの3時間を返してほしいですよ！
――結果的に不毛な3時間になってしまいました。
石田　ブラスナックルJUNに関することだけじゃないですよ。お互いのプロレス観についても話したし、なぜGLEATでやっているのか、これからどうしていきたいかもけっこう熱く語ったんですよ。なんだったんだよ、あの3時間は…。
――つぶらな瞳でスラスラと語る河上選手が目に浮かびます。よかったのはケーキを振る舞われたぐらいですね。
石田　まあまあ、いいケーキでした。マダムがいくような高級店の。
――コンビニのシュークリーム1個で済まされた伊藤貴則選手とはえらい違いですね。
石田　僕はシュークリーム事件、知らなかったんですけどそうだったらしいですね。逆に言うと、そういうところは気を遣うのにキャプテンフォールのルールは知らないんですって言い出さないというのも…そういう人ですよ、河上くんは。
――ファンの中には、あの試合で組んだことをきっかけに河上選手がB.G.I.に加入するのではと期待を抱いている人もいると思われます。
石田　絶対にない。絶対にない、絶対に…ない。絶対。あの花柄のコスチューム

で入れると思いますか。
――ああ、黒じゃないから無理か。
石田　河上隆一とブラスナックルJUNは、話題だけはやたら集めるじゃないですか。それはね、やっぱり話したくなるんですよ。それは僕もわかりますよ。だけどトーナメントに関しては申し訳ないですけど眼中にはないんで、話題だけ作ってください。話題枠でお願いします。こっちはトーナメントを盛り上げますから。まあ、決勝戦に関しては…今だったらTとやりたいかな。G-REXを懸けて負けているし、タッグタイトル戦では獲り返したけど、それはあくまでもタッグですから。シングルでキッチリと返したい。今はT-Hawkよりも持ち得ているものが多いんで、この状態でシングルをやりたいですね。まあ、向こうも進化はしているだろうけど。その上で、7月1日にスリータイムス・チャンピオンになります。去年の1月にG-REXを獲った時、僕はGLEATの建て直しを図ろうと思っていたんです。でも、中嶋勝彦に獲られて自分が少しずつ積み重ねてきたものが一気に崩れた。それをリンダマンが獲り返して、このままなんとかやってくれるんだろうなと思っていたら、あれから半年たっても変わっていない。変わらないことって、僕は悪だと思っているので、このまま任せてもただこれが続いていくだけ。平坦は嫌なんで今回、3回目獲ったら自分があの時にやろうとしたことに再び着手したいですね。石田凱士が思うGLEATというものを作っていきます。そこに関しては、まだ未完成なんで。

「G-CLASS 2026」出場選手に訊く ⑥KAZMA SAKAMOTO

僕が変化球だけだと思っている人も多いと思うんですけど…

5月13日より開幕するGLEATのシングルトーナメント「G-CLASS 2026」エントリー選手インタビューの第6弾は、KAZMA SAKAMOTOが登場。BLACK GENERATION INTERNATIONALでは石田凱士をはじめとする他の選手たちを前面に出し、自分は一歩引いて全体を俯瞰することでユニットとして機能させているバイプレイヤーが、シングルのトーナメントへ出場することについてどう思っているのか。(聞き手・鈴木健.txt)

石田からの呼びかけに対しての回答は…「基本、プロレスは振りだと思っている」

――前回、石田凱士選手とお答えいただいた公式インタビューでは「自分はタッグの方が好きでシングルマッチは嫌い」と発言していましたが、エントリー選手が厳選された中でご自身がシングルのトーナメントへ選ばれたことに関し、思うところをまずはお聞かせください。

KAZMA　なんで入っているのかなと思いました。でも、入ったということは期待されていると受け取って頑張ろうかなとは思います…嫌いですけど。

――本当に嫌いなんですね。

KAZMA　ただ、嫌いでもいつかは通らなきゃいけないので、頑張ります。ギアチェンジ？　大丈夫です、プロレスラーですから。

――普段見せていない部分を披露できるという点では、いい機会なのでは？

KAZMA　ああ、そうですね。ひきだしはたくさんあるので、それを開ける時ではありますよね。まあ普段は開けていないですからね。違うものを見せられたら、スペシャルでしょ？って言えますし。

――他のエントリー選手に話を聞くと「シングルプレイヤーのKAZMAとやっ

てみたい」という人が多かったんです。やはりプレイヤー目線だとそうなるんだと思いました。

KAZMA　いやー、そういう期待をされるのが一番困るんだよなあ。嬉しいもんじゃないですよ。だって僕がシングルマッチ嫌いだってことはずっと言っているんですよ？　だから、それに見合ったものがやれるのかっていったら自分でもそこはわからないので。それであまりやってこなかった部分もあるし。これね、改めて言いますけどプロレスはやっぱりシングルじゃないですよ、絶対！タッグマッチこそがプロレスというのが僕の感覚です。たとえシングルマッチで試合ができようが、何かに優勝しようがそこは譲れないです。なんか、シングルの王座の方がタッグよりも上に見られるじゃないですか。

――団体最高峰のシングル王座のタイトル戦が組まれる時は、それを差し置いてタッグタイトル戦がメインになることはほぼないですよね。三冠ヘビー級戦のあとに世界タッグのタイトル戦がおこなわれるような。

KAZMA　僕はタッグがメインのビッグマッチでも全然いいと思っています。むしろタッグの方がその日、プロレスの興行において最後に見る試合として、一番楽しめる可能性の方が高いと思うんです。だから、そこで区別されるのは好きじゃないって、ずっと思っていますよ。

――ただ、今回に関しては出るからには優勝を狙うわけですよね。

KAZMA　はい、優勝しますよ。ここに選ばれたということは、出ましただけじゃいけないんで。優勝を狙わなかったら、出られなかった人たちにも失礼だし。

――そう、今回に関しては出たくても出られなかった選手が多いんです。

KAZMA　僕は出たいと言っていなかったですけど、今回に関しては事前に出たいと言っていた人間は誰もいないんじゃないですか。

――ええ、だから発表になって「なんで俺が入っていないんだ！」という選手はいたと思われます。

KAZMA　会社の誰が選んだのかは知らないですけど、今回のメンバーは誰

が優勝してもおかしくないし、ここに壮馬がいても伊藤くんがいてもおかしくない。それこそ田中さんや鼓太郎さんもそうです。誰もおかしくないんですよ。でも、その中で選ばれた意味をしっかり考えながらやらなきゃいけないと思います。

――1回戦の相手・石田凱士選手とは2023年3月21日、大阪でG-REX王座に挑戦して以来のシングルマッチになります。

KAZMA　前回はとてもいいものができたという感触が今も残っているので、それ以上のものができるかどうかに関しては未知数ですね。いきなりバーン！っていうものができてしまうと、それを超えられるか超えられないのかが自分でも読めなくなる。それぐらい、あのタイトルマッチはよかったので。もう会場がデキ上がっている中、今までの二人の過程もありましたし、すごくいい空気でなぜか「カズマ」コールが起こって自分でも不思議だったんですよ。地元の石田より自分の方が大きかった。その空気に二人も乗せられてできた部分もあったと思います。だからそれとは違う空気の中でどうなるかが読めないんですよね。

――嫌だ嫌だと言いつつも、シングルのベルトを欲したわけじゃないですか。

KAZMA　そこは石田が持っていたからですよ。ほかの人間だったら動かなかったかもしれないです。

――その石田選手から伝言を承っていまして「揺さぶりとかインサイドワークではなく、直球勝負で来てくれ。気持ちのぶつけ合いをしよう」と。つまり、KAZMA選手の持ち味である灰汁の部分ではないところで来てほしいそうなんです。

KAZMA　へぇー、じゃあそういうことにしましょうか、直球勝負だ！って（ニヤリ）。あのね、僕はそうやって乗せられるのが嫌いなんで、向かい合ってみてどうなるかじゃないですか。いくかもしれないし、いかないかもしれない。向こうが来いって言っている時点で“振り”かもしれないんだから、言葉通りにいったところで向こうもその通りにくるかなんてわからない。

――振りですか。

KAZMA　基本、プロレスは振りだと僕は思っているんで。
――でも、直球勝負の対応もできるということですね。
KAZMA　（サラリと）できますよ、はい。僕が変化球だけだと思っている人も多いと思うんですけど、そっちが得意なだけで。変化球が効くからストレートが速く見えたりとかもあるじゃないですか。そういう意味では、オールラウンダーだと自分では思っているんですけどね。
――対戦相手が直球勝負を求めるのは、そういうKAZMA SAKAMOTOを見たいからというのがあると思いますし、GLEATを見続けているファンもそうでしょう。
KAZMA　直球勝負をするのはいいと思いますけど、お客さんが見たいもの、望むことをやるのがプロレスラーなのかな？とも思います。僕は、そこを裏切るのもプロレスだと思うし、直球勝負しないんだと思わせて出したり出さなかったりして探るのが僕たちなんで。お客さんの求めている通りのものを見せたら面白くなくなると思いますよ。それで、望まれた通りに直球を投げてみて「あれ？思っていたものと違うぞ」って言われたら嫌ですし。そこはこっちがコントロールすることであって、見る側がコントロールすることではないと思うんですね。
――そういう話を聞くと、予想ができなくなります。
KAZMA　健さんは石田のその要求を聞いてどうすると思ったんですか。
――僕はいつも以上に揺さぶりをかけて向こうの土俵に乗らないようにすると思いました。石田選手の気持ちは理解できるし、確かにそういうKAZMA SAKAMOTOも見てみたい。ただ、その一方で単純にKAZMA SAKAMOTOの灰汁を今の石田凱士にぶつけたら面白いと思うので。
KAZMA　なるほど。そうですよね、いつもと違うものを見せるのも一つのテでしょうけど、自分自身の根本を見せないと良さも出ない気がするんですよね。気持ちはもちろんぶつけますよ。それ以外に関しては、当日のお楽しみにということにしておいてください。

シングルのトーナメントで
自分自身の何が見えてくるか

――ただ、同じユニットに所属しG-INFINITYのベルトを持っているこのタイミングで対戦することに関しては、意義を見いだしていますよね。
KAZMA　4月の新宿FACEで1回戦のカードが発表になったのをバックステージで聞いていたんですよ。その時点で「これは俺と石田なんだろうな」と思っていたら本当にそうなったんで、そっかそっかと。まあ、会社も意味がなければ組まないでしょうから。タッグチャンピオン同士で、今までの過程もあって、前回の大阪の続き…自分と石田にしかない紡ぐものがあって、それがまた過程となり続いていくというね。だから僕も楽しみであり、一レスラーとしては前回負けているからその借りは返さなきゃいけない。一つひとつの武器の強さだったら、たぶん自分の方が破壊力あるんで、いけると思っています。
――そこで石田選手に勝てば、準決勝はリンダマンvs山村の勝者と当たることになるわけですが、これも前回のインタビューで「GLEATの若手はもっと主張して動かなければ」と言っていました。その対象がまさに山村選手になるわけですが。
KAZMA　今は、いいレスラー止まりじゃないですかね。別にクセがあるわけでもないし、特に印象はないです。今までGLEATでもいろいろとユニットができてきましたけど、別に可もなく不可もないポジションであってもいい試合はできますから、平均点よりちょっと上のレスラーじゃないですか。だから、波がないんですよね。
――ということは、リンダマン選手が勝つと。
KAZMA　いや、山村くん。ここはいかないとダメでしょ。その方が面白くな

るんだから。リンダマンが絶対王者とは僕、思っていないんで、だから勝つチャンスはあると思います。さっき言ったように、誰が誰に勝ってもおかしくないんだから。山村くんはそれこそ何か違うものを出して…ここでいい試合だったと評価されたところで何も変わらないですから。どちらが勝つにしろ、また反対側ブロックから誰が勝ち進んでこようと、僕はあまり関係ないです。誰であってもそれなりに対応できるから。これが2m以上ある外国人だとか、浜亮太だとかじゃない限りは、自分自身がぶれることはない。基本になる芯はあるから、あとはそこに何をどう乗っけていくか、肉づけをするかなんで。

――あの河上隆一の色にも対応できると。

KAZMA　あれは僕がどうというよりも、お客さんが喜んでいるんだからいいんじゃないんですか。僕が「うーん…」と思うところがあったとしても、喜ばれているならそれでいいし。そこで勘違いしてお客さんの手の平の上で踊らされない限りはね。

――ブラスナックルJUNに関しては？

KAZMA　ぶれていますね。今までは（河上“シャーマン”隆一の）金魚のフンだったイメージが強かったのが、TheSickというものができて何を見せられるのか、どんな隠し玉を持っているのかじゃないですか。頑張ってほしいかな。

――頑張ってほしいんですね。

KAZMA　いや、何か違うものを見せてほしい。誰であろうと、プラスアルファって大事だと僕は思っているので。今の時点では、それが見えていない。結局、ブラスナックル（メリケンサック）ありきでしょ。武器ありき、セコンドの介入ありきじゃ本質は何も変わっていないんで。ましてや今回はシングルのトーナメントですから、セコンドがいない場合はどうするのか。そこでいたら、それこそ今までと何も変わらない。こうやってね、他人のことは俯瞰で見られるんですよ。でも、自分のことは俯瞰で見られないというか、見えてこない。だからタッグマッチの方がいいんですよ。シングルマッチだと俯瞰で見えないものが、タッグだと全体を見渡せる。まあ、今回はシングルのトーナメントなん

で、そのシチュエーションで自分自身の何が見えてくるのかっていうのも楽しみですよね。
——KAIENTAI DOJOの時は、団体最高峰のシングル王座（CHAMPION OF STRONGEST-K）を保持していた時もありましたが、その時はどう見えていたんですか。
KAZMA　あの頃は無理して頑張っていた気がします。完全に背伸びしていました。
——あの時点でシングルよりもタッグ向きだと思っていたんですか。
KAZMA　そうです。真霜拳號と組んでいたじゃないですか。彼はタッグパートナーをコントロールするうまさがあって、お互いで若干引き気味にやっていました。
——お互いがパートナーを際立たせようとしていた？
KAZMA　そう。隣にいた人間の影響は大きいですよ。真霜の場合はシングルプレイヤーでもあり、両方できるんですよね。その分の主張は強かったのに対し、僕はそんなに主張が強くない。周りのいい木が育つ環境の中で、その影響を受けて自分も育った時期だったと思います。だから、その時に見たもの、感じたもの、身につけたものがDRAGONGATEに上がって生かされたんです。
——オープン・ザ・ツインゲートとオープン・ザ・トライアングルゲートを獲ったのはまさにKAZMA選手の真骨頂です。
KAZMA　自分がいたR.E.D.とかは若い選手がいっぱいいたんで、自分が出るよりは彼らに頑張ってほしいというのもあったし、自分ももちろん出たけど、そういうふうに俯瞰して一歩も二歩も引いてやっていた時は（そのユニットは）強かったと思います。

「わかってくれるだろう」と求めないし見えちゃっているのであればまだまだ

——KAZMA選手のプロレス観を聞くたびに思うのは、よくその方向に自分を持っていけているなと。自分が前に出たいというエゴが優先されないんですね。
KAZMA　それは僕が影響されているのが東京愚連隊のNOSAWA論外&MAZADAで。あの人たちがいなかったら僕は勘違いして前に出よう出ようとしていたかもしれない。実際、そうやってしまって「そこはそうじゃないんだよ」と試合直後に言われたこともあったんで、その影響は強いです。
——だからこそ、それがわかっている人間がシングルマッチになったらどんな

プロレスを描くのかっていうのが興味深いんです。
KAZMA　ほら、それがまたプレッシャーなんですよ。できると思ってはいても、やってきた経験が少ないから。不安と楽しみの二つ、我にありですよ。
――自分試しの場でもあるんですね。
KAZMA　今回、こんなトシになっても自分試しができるのは光栄ですよね。同世代のみんなを見ているとシングルでもちゃんと頑張っているんですよ、鷹木(信悟)さん、石森(太二)さん、飯伏(幸太)くん、宮本裕向、他花師とかね。
――昭和57年会の皆さんですね。黄金の世代の皆さんも43歳になるんですね。
KAZMA　その年の人たちはみんな灰汁が強くてシングルもできて…もちろんタッグもできますけど、シングルプレイヤーとして実績を残してきた人たちが多いじゃないですか。自分だけがどちらかというと一歩引いているタイプなんですよ。だから、その人たちと比べて目立っていないのは自分でもわかっている。それでいいと思ってやってきたから。たまに欲が前に出ちゃってやりすぎたなって思う時もあるんですけど、今回に関してはいかなきゃいけないところなんで葛藤はあります。
――GLEATが団体としてもキャリアがまだ若かった時点で、ユニットやタッグの経験が豊富でそういうスタンスをとれる選手がいたのが、今思うと大きかったと思うんです。みんなが我先にとなる中で、全体を見据えて自分の立ち位置を考えられる人間が…BULK ORCHESTRAが暴れていた当時、鈴木裕之社長に「KAZMA選手の存在って大きいですよね」と言った記憶があります。
KAZMA　よく見てくれている人はわかっているとは思うんですよ。そこはわかってもらえたら嬉しいとは思いますけど、わからなかったらわからなかったでいいと思っているんで。表に出る人たちがちゃんと目立って、その印象が強いほどみんなの目はそっちにいって僕のような立ち位置の人間は目立たなくなる。それでいいんです。だから「本当はわかってくれるだろう」と求めてはいないし、もしも見えちゃっているのであればまだまだなのかなとも思うし。本来は気づかれないままうまくできているのが一番いい。ディック東郷さんや金丸義信さんがそうじゃないですか。でも、そういう方でさえ最近はわかってきちゃっているんですよね。それって僕はあまりよくない気がするんですよ。
――万人に理解され、評価された方がいい立ち位置の選手と、気づかれず、評価されぬままやれた方がいい選手と。ただ、何らかの評価を得ることはモチ

ベーションにつながるんじゃないんですか。

KAZMA　だから、このトーナメントに優勝したら一つの評価を得られるわけですから。それもわかりやすい評価じゃないですか。ベルトにしても、結局はわかりやすい形だから、それが一番いいんだと思うんです。

――トーナメントに優勝すれば、7月1日の5周年記念大会のメインでG-REX王者に挑戦する公算が大です。自分自身が団体のトップに立つことは求めていますか。

KAZMA　求めているかどうかは自分でもわからないですけど、これも一度は通らなければならない道だと思っています。というのは、一度も（GLEATの）シングルのチャンピオンになっていないんで、なった人の気持ちというものがわらない。わからなかったら、他人に対し何も言えないじゃないですか。

――「チャンピオンになってもいないのに、何がわかるんだ」と言われたら、経験していない分、返しづらいですね。

KAZMA　何かを感じても言えないんですよ、立場的には。だから期待というものをされているのだとしたら、それに応えたい気持ちよりも通らなきゃいけないという方が強いですね、個人としては。避けたいですけど、避けちゃいけない。でも、そういったシチュエーションになったことで、こうしてKAZMA SAKAMOTOの意思を強く打ち出せたわけですから、それはそれでいいんじゃないかって思うんです。

「G-CLASS 2026」出場選手に訊く ⑦河上隆一

お花畑にも毒草やトゲのある薔薇が生えてくるかもしれませんよ

5月13日より開幕するGLEATのシングルトーナメント「G-CLASS 2026」エントリー選手インタビューの第７弾は、河上隆一が登場。今やGLEATの太陽としてすっかり人気者になった河上だが、生まれ変わった以後はこれといったシングルの実績を残していない。にもかかわらずエントリーされた意味を本人はどう受け止めているのか。そして１回戦の相手・ブラスナックルJUNのブラスナックル対策はできているのか、訊いてみた。（聞き手・鈴木健.txt）

河上隆一エチレンガス説
トーナメントの明るさ担当

――河上“シャーマン”隆一から、GLEATの太陽・河上隆一に生まれ変わった以後、シングルでの実績がないにもかかわらず「G-CLASS 2026」の選ばれし８エントリー選手の中に入りました。

河上　これはですね、まさに“青天の霹靂”というやつです。実績ゼロどころか、それまでの所業を思えばマイナスですよ。にもかかわらず、この河上隆一を入れてくださった会社には土下座してでも感謝を伝えたいです。

――いやいや、感謝は土下座する必要ないですよ。

河上　私が思うに、今回エントリーされたのは、ズバリ言って“期待”だと思っています。もちろん、それを自分で口にするなんていうおこがましいことはしないですが、わかりやすく言い表すとそうなります。

――具体的に、何に対する期待をされていると思われますか。

河上　GLEATをなんとかしてほしいという、雨乞いの儀式のような声が有楽町の電気ビル北館内から聞こえてきます。これは幻聴などではありません。前世なのかなんなのか、私の記憶の中にはないGLEATへの蛮行をこのトーナメントで実績を出すことによって清算し、あの時に自らの手で暗黒にしてしまっ

たGLEATを明るく照らす役どころを任せたいという意図が、ビッシビシ伝わってくるんです。河上隆一が帰ってきた3月の新宿FACEから、明らかに会場の雰囲気が変わっていますよね。

――はい。

河上　最初は、自分一人の影響でこんなにも変わるものなのかなと半信半疑だったんですが、お客さんもGLEAT所属のレスラーも何かに感化されたかのように明るくなっているんですよ。それはおそらく、河上が明るいんだから俺たちも明るくてもいいんじゃないかという、空気を感じたからだと分析しています。言うなれば、私は野菜や果物が発せられるエチレンガスのようなものです。

――河上隆一エチレンガス説。

河上　明るさのエチレンガスを放出しているんです。これからはエチレン河上って呼んでもらってもいいぐらいです。トーナメントって、どうしても勝負論一本になってけっこうシビアな中でおこなわれるじゃないですか。その中にも明るさを持ち込みたいという意図が会社側にあって、私を入れたのだと解釈しているんです。

――なるほど、G-CLASSの明るさ担当ですか。

河上　そして初戦がブラスナックルJUNというね。これはもう、運命のいたずらとしか思えない。正直、このタイミングでの清算マッチは早いのでは？と思ったんです。これまで、私はブラスナックルJUNに負けまくりですよね。

――目を覆いたくなるような敗北が続いています。

河上　その借りをまったく返せていないですから。しかもTheSickに対しリング上で「シックハイドロ」と言ってしまったじゃないですか。あれ、隣にいた石田くんがツボにハマって涙目になっていたんですよ。ああいう普段は見られない石田凱士を引き出せるのも、今の河上隆一なのかとも思うんですけど。

――ご本人は記憶にないと思うんですけど、昨年も出場していて1回戦で

KAZMA SAKAMOTO選手に敗れているんです。
河上　シャーメンの頃ですよね？だとしたら、それはどーでもいい話です。なぜなら私は完全に生まれ変わったので、その敗北は他人の敗北です。だから私は今回が河上隆一の初出場だと思っています。いや、初出場です。そんなことを引きずるよりも、これからやるべきことに集中した方が建設的です。今、考えているのはブラスナックルのブラスナックル対策です。
――凍結パンチや絶対零度をいかに食らわないようにするか。
河上　あれ、本当に痛いんですよ！物自体が小さいんでわかりづらいじゃないですか。レフェリーも見えにくいから瞬時にはチェックできないし、何より見えづらいからどれだけ痛いかがお客さんに伝わらない。やられる側としては、やられ損なんですよ。
――伝わらないので、どんな痛さなのかたとえてください。
河上　たとえると…箪笥の角に足の小指をぶつけた痛み。
――うわー、それは嫌ですねえ。
河上　それが頭部に起こるんですよ。箪笥の角に小指ぶつけるのって、どんなに鍛え上げたレスラーでもその場でうずくまって悲鳴をあげる痛さじゃないですか。それが頭を襲うことを想像してみてください。想像を絶しますよ。
――それは両肩をスリーカウント分つけられても反応できないですよね。
河上　厳密には反則行為ですから認めたくはないですが、実は非常に合理的なやり方なんですよね、あれ。でも、裏を返せばブラスナックル対策さえちゃんとやれば大丈夫だということです。
――何か秘策はあるのですか。
河上　簡単です。試合開始前のボディーチェックを入念にやってもらう。ブラスナックルJUN本人はもちろん、TheSickのメンバーがセコンドにつくならセコンド全員も厳格にチェック。あとはターンバックルの中もチェックしてもらって、ようやく疑念なくできるかと。なのでこの試合に関しては、いつも以上に時間をかけてレフェリーチェックをやってもらうので、コールから開始のゴングまでお客さんには少々お時間をいただくことになってしまいますが、ご理解いただきたい。
――ただ、そこをなんらかの手で突破してくるのがTheSickでは？
河上　そこも想定済みです。おそらく、総動員で来るでしょう。
――多勢に無勢です。
河上　それを私がどう切り返せるか。最初からわかっていれば、なんらかの策はできると思っています。
――普通に考えれば、人数には人数ですよね。誰か協力してくれる選手はいないんですか。
河上　うーん、ほかの所属選手はG-CLASSに出る人ばかりじゃないですか。そうなると、トーナメントで当たるかもしれない人間を助けようとはならないと思うんですよね。ただし、私が歩くお花畑になった影響で、シャーメンだった頃の悪いイメージが薄れつつあるからワンチャン、助けに来てくれるという可能性はなきにしもあらずだとは思っています。それこそ、所属選手全員が来るかもしれない。そうなったら完全に数でTheSickを上回りますからね。もう、わっしょいわっしょい！ですよ。だから、そういう状況になった時に今の私がGLEAT内でどう思われているかがハッキリするでしょう。心情的には助けに来てほしいですけどね。山村、田村、T-Hawkは特定のユニットに所属していないわけだし、なんなら石田くんにも助けに入ってもらいたい。この前（キャプテンフォールマッチ）はうまくいかなかったけど。
――うまくいかなかったどころか、もう組まないと言っていました。
河上　あらら、そうですか。でも、石田くんに限らずなんならKAZMAにも来てほしい。まあ、そういった数には数で対抗するということも頭に入れつつ、やる感じです。

G-CLASS優勝後は中嶋勝彦戦を希望
シングルの方が自分のワールドを描ける

――キャプテンフォールマッチ前までは、ブラスナックル選手に対しての憎しみはなく、話し合いという平和的解決を望むと言っていたじゃないですか。これだけブラスナックルで頭をぶん殴られても同じ気持ちでいるんですか。

河上　そうでしたね…まことに残念な話ですが、向こうにまったくそのつもりがないようなので。まあ、先ほど清算のタイミングが早いと言いましたけど、こうなったからには今回で本当にケリをつけます。この一騎打ちをもって、ブラスナックルJUNとは終わり。その場でバリカンを使ってモヒカンを刈りあげます。マイバリカンを持っているんで。そうすれば、もとの純朴な青年だった頓所隼に戻るでしょう。

――あれはモヒカンにしているから人が変わったんですかね。

河上　そうですよ。諸悪の根源は、あのモヒカンです。あまりうかつなことは言えませんが、もしかするとあのモヒカンの中に何かが隠されているという説もある。人を狂わせる電磁波が出ている何かが。「魁!!男塾」に出てくる卍丸の刃物みたいな。いずれにせよ、そういう形で誰が見ても決着したと思えるものをちゃんと提示しなければならないと思っています。ブラスナックルJUNとのシングルマッチを1回戦に持ってきたということは、会社もここでの決着を望んでいるということでしょうから。

――今、もっとも旬なシングルマッチのカードを1回戦で組んでしまうあたりからも、それはうかがえますね。

河上　今のGLEATは出し惜しみしている余裕はないですから。常に全力疾走。短距離走を走るペースで長距離を走り続けるようなものです。そこは、私がリング上を明るくするだけではまだ足りない部分じゃないですか。やっぱり、お客様の信頼を積み上げる必要がある。いわば、この1回戦4試合はそのためのマッチメイクだと受け取っております。

――トーナメントとはかけ離れるんですが、元・反GLE MONSTERSが結成したTheSickに関しては今のところどのように映っていますか。

河上　これはある意味、他人事とは思えない部分があります。私も過去に悪いことをしたわけですから、そういう方向に走ることに関しては理解もできるんです。でも、去年までのGLEATの陰を彼らが引きずってしまっていると思う

んですよね。だから彼らとの闘いは究極の陰と陽のせめぎ合いなんです。私の陽が彼らの陰を上回って、明るさで包み込むことができるのか。
――わかりました。では、反対ブロックに関しての見方をお話ください。
河上　順当にいけばリンダマン。石田vsKAZMAは正直、見えない部分があります。でも、私の希望はKAZMAです。
――ああ、そう答える選手が多いんです。
河上　そうなんですか！私は、大きい人とやりたいというのと、あと彼は参謀役的な役割を担っているじゃないですか。正直、もっとできる選手だと思うんですよね。シングルプレイヤーとして今より上にいけるし、身長もあるし、攻撃力もある。だから、本当はもっと評価されていい選手だと数年前から思っていたんです。その意味でもKAZMA SAKAMOTOを味わってみたいという思いがあるし、でも石田くんとも闘ったら絶対に面白いものになる自信があるし…ただ、一つ言えるのは誰が決勝戦に出てきても河上隆一ワールドにすることができる。だから誰とやっても明るく、楽しくなると思っています。実は、G-CLASSに優勝した上でやってみたい相手がいるんです。
――それは誰ですか。

河上　中嶋勝彦です。彼は昨年優勝者なのに今回出ていないじゃないですか。あと、シャーメン時代にやって負けているそうなんですけど、お花畑・河上とはまだやっていない。だから、優勝した上でディフェンディングチャンピオンと“初の”一騎打ちでやってみたいんですよね。
――勝ち進めばシングルマッチの連戦が続くわけですが、得意分野ですか。
河上　得意かもしれないです。1対1の方が私のワールドを描きやすい。でも、向こうは向こうで自分のペースに引き込もうとするだろうから、そこがプロレスならではのせめぎ合いですよね。準決勝にしてもT-Hawk、田村ハヤトという名前を見ただけで私自身がワクワクしますから。どっちも対戦したいですよ。あのね…どっちもやりたい。
――2回言いましたね。
河上　T-Hawkも世代的に近いし、彼のプロレスセンスはやっぱりズバ抜けているし、GLEATの中だけでなく日本プロレス界のトップの選手。でも、いまいち欲がないように映るんですよ。彼とはGLEATの旗揚げ戦でシングルマッチをやっているんですけど、その頃と比べるとお互いトシは重ねているんで、同じようにトゲトゲするのは難しいかもしれないけど…時間が経つにつれて尖った石が水に打たれて丸くなるようなもので、丸くなっていくのは人間として当たり前だとは思うんです。でも、丸くなったその先に何があるか知っていますか？
――知らないです。
河上　丸くなったあとは、お花畑になるんですよ。私がそうじゃないですか。トゲがないでしょ。でもですよ、丸くなった石も割れたらまた角ができてトゲになるんです。お花畑もいきなり毒草が生えてくるかもしれない。トゲのある薔薇が生えるかもしれない。その方が面白いじゃないですか。T-Hawkという角ばった石が時とともに丸くなり、お花畑になったあとトゲトゲしい薔薇になったら魅力的だと思うんですよね。あと田村くん、ド直球ファイターであると同時に彼って器用貧乏じゃないですか。わりとなんでもできてしまう。それって実はすごいことなのに、あまりにできてしまうから印象に残らない。まずはタムラワールドと呼ぶべき自分の絶対領域を持つこと。それにはヘビー級同士の闘いとなる私とやることで開眼するかもしれない。
――なるほど。実によく見ている分析だなと思います。ただ、今回のトーナメントに関しては他者がよくなることを考えている暇はないというか、まずはシングルの実績がない自分をどうするかでは？
河上　これは痛いところを突かれました。今の時点で私に対する評価というのはとても曖昧というか、なんとなくフワフワしたものであるのは自分でもわかっているんですよ。その場のノリで見られている。でも、結局はリングの上がすべてじゃないですか。どれほどカッコよかろうが、かわいかろうが最終的な評価はリング上で何を提示するか。
――SNS等で熱心に発信されている河上選手ですが、そこだけの評価は本当の評価ではないと言いたいんですね。
河上　そうです。仮に護摩行をやろうが、炎にあぶられてそれをSNSにポストしようが、一過性のものです。そんなものに頼っていてもロクなもんじゃありません。今回出場する全員が、そこは理解していると思います。リング上がすべて。

デパートの包装紙は人を幸せにする
ストロベリーエレファントはもう1匹いた

――今のところ戦績的にはパッとしないという事実こそあるものの、生まれ変わったあとの自己評価はどんなものになるんでしょうか。
河上　調子はいいです。自分が放つエチレンガス、自分が作り出すワールドの領域に自身の能力を上げられている気がするので。あとはシャーメン時代に

はなかった応援されることによって、すごいエネルギーを感じます。お客さんの声によって強くなれる…忘れていた感覚が戻りました。どこかへ置いてきてしまった感覚が戻ったことの相乗効果で今、身体能力も上げられているんです。

――それを思うと、戦績的に伸びないのが不思議です。

河上　そうは言うても、負けたのはほとんどTheSick絡みじゃないですか。ブラスナックルJUN以外には負けていないですから、それほど自分が不調だとは思っていないんです。負けたところばかりがクローズアップされるから、あたかも連敗街道をバク進しているようなイメージで見られているかもしれませんが、言うなればこれまではお花畑になってそれに慣れるための期間だったのかなと。研修期間…まだつぼみなんですよ。それがブラスナックルJUNとの試合で満開になる。

――もしかすると…現在のコスチュームは花が咲く過程を表現したものだったんですか。

河上　ようやく気づいてくれましたか。やっぱりね、180° 変えなきゃいけないと思ったんです。中途半端じゃダメ。

――それで漆黒の真逆でお花畑？

河上　そういうことです。だから、このコスチュームそのものが花言葉のようなメッセージ性をまとっているんです。

――石田選手からは「大阪のおばちゃんのようなファッションセンス」と言われ、ブラスナックル選手からは「デパートの包装紙かよ！」と心ない言葉を浴びせられましたが。

河上　まったく気にしていないです（爽やかな笑顔）。私はGLEATを明るく楽しくするためならどう思われても、どう見られてもいいと思っています。だってカッコいいプロレスラーはほかにいっぱいいるじゃないですか。同じことをやっても明るくすることはできないですから。そこは変なプライドもないです。デパートの包装紙、大いにけっこう。デパートの包装紙って、人を幸せな気分にするじゃないですか。贈り物を受け取った時に、華やかな包装紙に包まれたものを手にした瞬間の高揚感を思い出してください。誰もが一度は経験しているでしょう。あれは本当に、顧客のことを考えた良い文化だと思うんです。河上隆一という包装紙に包まれた多幸感をファンの皆さんに味わってもらえたら、あのコスチュームにした甲斐があるというものです。

――立派ですね。

河上　あとは、やはりかつて自分がやってきたことに対する贖罪の思いもこめられています。過去のこととはいえなかったことにはできませんから、そこは背負った上でポジティブに進むためのお花畑なんです。いわば涅槃の風景

ですよね。
――新技に「ストロベリーエレファント」と名づけたのは、明るさやポップなイメージを表現するためだったんですか。
河上　それもあります。「ブレインロット」というゲームはご存じですか？そこに出てくるキャラクターの一つなんですけど、そのキャラクターの何がいいって、すべて著作権フリーなんです。で、その中にイチゴでできた象が出てくるんですけど…（スマホで画像を見せる）ほらね。
――おおっ、本当だ！かわいいじゃないですか。でも、なぜその名前を引っ張ってきたんですか。
河上　そのゲームをやっていたある人が、いきなり「ストロベリーエレファントだ！」って言うんですよ。それを聞いた時、私も「な、何ぃ？　ストロベリーエレファントだと!?それはいったい、なんだ？」ってすごく引っかかったんですよね。これはもう、プロレスの技につけられるようなネーミングじゃないかと。甘い匂いで誘った上で、エレファントのように潰す…その字ヅラだけでもいい技っぽいじゃないですか。
――でも、あの技は昔からあるフェースバスターですよね。
河上　そこは名前先行だったんです。どの技がストロベリーエレファントにハ

マるかと考える中で、大きい相手にも決められる技がいいと思っていたらYouTubeでターザン後藤さんが使っているショート動画をたまたま見たんです。これだ！と思いました。

――なんとまあ、ショート動画から使う技が生まれる時代。

河上　フェースバスターそのものはターザン後藤さんの正統継承者であるガッツ石島さんが使っているので、私は違う名前で使うべきでしょう。その意味でもストロベリーエレファントでよかったんです。さらにですよ、あまり大きな声では言えないんですがこの技の進化版もあります。それはこのトーナメント用に開発したものです。

――エレファントは1匹じゃなかったんですね。

河上　大きいストロベリーエレファントもいるんです。それを決められたら、誰が相手でも確実にスリーカウントを獲れます。ビッグストロベリーエレファント…略してBSEが見られる日を楽しみにしていてください。やっぱりプロレスラーは常にアップデートされる姿を見せるべきだと私は思っているんです。もしかすると、このお花畑も…。

――コスチュームもヴァージョンアップすると。

河上　これ、春夏用なんで秋口になった頃に秋冬用を披露するかもしれません。季節モノではなく、一年中咲き誇る河上隆一という名のお花畑によって皆さん、明るくなってください！

「G-CLASS 2026」出場選手に訊く ⑧ブラスナックルJUN

俺が世界へ出て有名になるため、GLEATは踏み台になってもらう

5月13日より開幕するGLEATのシングルトーナメント「G-CLASS 2026」エントリー選手インタビューのラストは、ブラスナックルJUNが登場。2・11後楽園で河上隆一を裏切り、新ユニット・TheSickを始動させ勢いに乗る中、シングルプレイヤーとしての真価を問われる場となるが、本人はまったく意に介さず他のエントリー選手をザコ呼ばわり。その上で、トーナメント後の壮大なプランまで言及した。(聞き手・鈴木健.txt)

トーナメントを盛り上げるために俺以外の7人を外の選手にしなかった会社は怠慢

ブラスナックル　なんだ、ザコ！なんか用かよ。

――すいません、お忙しいところ。今日はブラスナックル選手の「G-CLASS」に対する意気込みを聞かせていただきたく、インタビューをお願いしました。

ブラスナックル　ああ？そんなもん聞くまでもないだろ！俺が優勝する以外、語ることなんて何もない。それ以外のことは聞くな！ほかのザコどもにも聞く必要はない。

――いえ…実はブラスナックル選手以外の7人にはすでに取材しておりまして。

ブラスナックル　相変わらずザコマスコミだな、おまえは。そんなもんに時間を使うなんてムダ以外の何ものでもないことをわかっていない。だからムダに長くこの業界にいるんだろ。

――返す言葉がありません。

ブラスナックル　だいたい俺は、このトーナメントに対しいい感情を持っていないんだよ。去年のことは憶えているか？

――昨年は出場していないですよね。

ブラスナックル　バカヤロウ！最初はエントリーされていたんだよ。それが直前で足首をケガして（骨挫傷）欠場になった。
――そうでした。しかも現在、同じTheSickのメンバーであるロック岩崎選手が代わりに出場したんですよね。
ブラスナックル　それもあってトーナメント自体にはいい感情がないんだけど、シングルマッチ自体は好きだから。最近はタッグマッチばっかで、飽き飽きしていたところにシングルのトーナメントなんで、そこに関してはまあ気持ちを入れ替えてやるかと思っていたんだよ。なのにメンバーが発表されたらどうだ？俺以外の7人は全員ザコじゃないか。これでモチベーションを上げろという方が無理がある。GLEATは俺の楽しみを奪うつもりでこのメンバーにしたのか？
――でもブラスナックル選手は常日頃、自分以外のGLEATの選手はザコだと言っているわけですから、そうなるのはわかりきっていたことじゃないですか。
ブラスナックル　バカヤロウ！自分のところの所属選手がザコしかいないからって、そのまんまなんの工夫もなくザコを出場させてどうすんだよ。本気でトーナメントを盛り上げたいんだったら、俺以外の選手は外から呼んでくるぐらいのことをやれよ。GLEATは本当にこのトーナメントを盛り上げようとしているのか？　怠慢だろ。
――ブラスナックル選手以外のエントリー選手がすべて他団体のプロレスラーだったら、開催する意味がないですよ。
ブラスナックル　おまえは本当に考え方が凡庸だな。俺以外の選手が全員他団体だったら、俺が優勝した時点でGLEATが業界ナンバーワンだっていうことを証明できるだろ。それがわかっていながら動こうとしない会社は、手持ちの札だけでとりあえずやっている感を出そうとしているのがミエミエなんだよ。だからここで言っておく。俺以外のザコ7人は優勝を目指すことなんてしなくていいから、このブラスナックルJUNを楽しませることを目指せ。それ以

外のよけいなことは一切考えるんじゃねえ。
――ブラスナックル選手を楽しませるために頑張って闘って、勝ち進まなければならないと。
ブラスナックル　この俺を楽しませる自信があるやつが勝ち上がってこい。
――1回戦の相手が因縁深い河上隆一選手です。
ブラスナックル　因縁？そういう見方自体がズレまくっているぞ。俺はもう、あいつに何度も勝っているだろ。もうケリはついているのに、因縁も何もあるかよ。やる必要がないカードを今さら組んで、GLEATはやる気があるのか？ないだろ。
――でも今まではタッグだったので、シングルマッチこそが決着の場ではないかと。
ブラスナックル　じゃあ、言ってやるよ。正々堂々と闘います！これで文句ないだろ。1対1の闘いだから、正面からやってあいつをぶちのめしてやるよ。
――河上選手は絶対にセコンド陣が介入してくると言っていましたので、その言葉を鵜呑みにするとは考えにくいです。
ブラスナックル　どう受け取るかは勝手だが、俺は本当に正々堂々といくから。もう二度と俺とやりたいなんて思わせないようにな。ただし！ここで言う正々堂々は、俺なりの正々堂々だから。河上隆一の思う正々堂々とは、正々堂々が違うかもしれない。
――ブラスナックルJUNが思うところの正々堂々？
ブラスナックル　プロレスは100人いれば100通りの見方があるって、おまえらマスコミが何もかもわかったような顔をしてよく書いてるじゃん。それと同じで、100人いれば100通りの正々堂々があるという世の中の真理を河上は学ぶことになる。こっちが正々堂々といくんだから、河上の方こそあくどいことはやるなと言いたい。まあ、やったところで俺には通用しないけどな。
――正々堂々とブラスナックルを使用するということですか？
ブラスナックル　さあな。闘う前からどんな技を出すかペラペラ喋るバカがいるかよ！とにかく、もう河上はこの俺にまとわりつくな。しつこいんだよ。あいつの頭の中を表現しているあのコスチュームが目に入るたびにチカチカしてうざいんだよ。なんで会社はそんなに俺と河上を当てたいんだ？　まだこの俺に対する嫌がらせを続けるつもりなのか。
――ああ、音響事件をまだ根に持っているんですね。
ブラスナックル　あれは本当にヒドい。ユニット名を発表して、これからいくぜ！っていう締めをするところでタイミング悪く音出しするとか、企業が個人に対するやる仕打ちじゃないぞ。あれは訴えられても文句言えないパワハラだ。おい、今までのプロレス史で、あそこまで露骨に会社が一選手に嫌がらせをしたケースってあるのか？
――いやあ、ああいう形ではないと思います。
ブラスナックル　本当にこの会社は恐ろしいよな。一番の聞かせどころを邪魔するということは、観客の楽しみも奪ったことになるんだぞ。プロレス団体としてあるまじき行為だと思わないか。
――現場のお客さんはニヤニヤしていました。「この間の悪さこそがブラスナックルJUNだ！」的な。
ブラスナックル　なんだよそれ！普通、あそこは客も怒る場面だろ!!　会社がプロレスラーに対し嫌がらせしているのをニヤニヤして眺めているなんて、プロレスラーに対する尊敬心がないのか？そんなのは、真のプロレスファンではない。ザコだ！とにかく今の俺はファンにも対戦相手にも、会社にも不信感しかない。
――誰も信じられないですね。
ブラスナックル　その中でも社長の鈴木（裕之）だ！あれは相当腹黒いぞ。前回のインタビューで「ディズニーランド拉致事件」について話したよな。あのあ

と、あいつは何をやった？
――Xでその時の楽し気にしているブラスナックル選手の画像を晒していましたね。
ブラスナックル　あれが一企業の社長がやることか!?　あんなのを出されたらこっちは商売上がったりだろ！(怒)　写真なんて、切り取り動画のようなものなんだから、あれ一枚ですべてを判断されたらたまったもんじゃない。
――でも、実際に楽しそうにしていたじゃないですか。
ブラスナックル　バカヤロウ！楽しくなんかしてねえよ。よく見ればやらされているのが丸わかりだろうがよ。そんなことを個人の保身に走って晒してなんの得になるっていうんだよ。自社の所属選手の大事な大事なキャラクターを崩壊させるプロレス団体の社長って…おい、これは大問題だぞ？　俺が肖像権を主張して訴えたら、あの社長は終わるぞ。いやー、あり得ない。これはもう、本当にあり得ない。
――そういったあらゆるものに対する不満が溜まりに溜まりまくった結果、今のような行動を起こしているんですね。
ブラスナックル　そうだよ、悪いか？今の俺を突き動かしているのは、すべてのものに対する不信感だ。

リンダマンはどんな汚い手を使ってでも上がってこい。決勝戦は2秒で終わらせる

――ネガティブな感情ほど、とてつもないパワーになると。信じられるのはTheSickのメンバーだけ…。
ブラスナックル　(食い気味に)いや、信じていない。前も言ったが、あいつらが勝手にくっついてきているだけだ。
――前回はそう言っていましたが、ユニットとしてスタートして絆のようなものが深まったのでは？実際、お揃いのTシャツを着ているじゃないですか。
ブラスナックル　そんなことで仲間になったと思うおまえは浅はかすぎる。あれはわかりやすいからやっていることで、別にそれによってお友達になりましたー！とはならないだろ。nWoの見すぎだぞ。俺らは会場以外では会わないし。
――それこそ一緒にディズニーランドへいったりしていないんですか。クリス・ヴァイスinディズニーとかいい絵ヅラになるかと…。
ブラスナックル　……(無言でニラむ)。

――あ、すいません。
ブラスナックル　金魚のフンは、金魚のフンだ。まあ、ユニット名発表の日にクリスが何食わぬ顔でいたのは俺もちょっと驚いたけどな。誘ってもいないのに、来たから。
――クリス選手はいまだに反GLE MONSTERSのままだと思っているんじゃないですか。
ブラスナックル　さすがにそこまでボケてねえだろ。とにかくサトケーも岩崎、木下もそうだけど、俺らあんまり会話もしないんで、そのへんのことは各自がどう考えているか確認もしていないんだよ。なぜ河上を追放して新ユニットにしたのか、こっちも説明してねえし。
――それでもユニットとして機能しているのは逆にすごいですよ。あのう、そもそもなぜユニット名をTheSickにしたのでしょう。
ブラスナックル　あー、バカなザコどもはそのまんま「病気」の意味に受け取っているようだが、学がないよな。Sickっていうのは、スラングで「ヤバい」「イカレたぐらいにイケている」っていう意味があるんだよ。
――よく知っていましたね。

ブラスナックル　それにブラックなんちゃらみたいな長ったらしい名前よりも覚えやすいだろ。あれはセンスないよな。本人たちはイケてると思っているようだが、おまえも実況で言う時にたどたどしいもんな。
――確かにBLACK GENERATION INTERNATIONALを「ブラッドジェネレーション」と言いそうになる時があります。よく気づきましたね。
ブラスナックル　そんなザコ実況のおまえでも「ザ・シック」を言い間違えることはないだろうから、感謝しろ。シンプル・イズ・ベストだ。
――でも、せっかくイケてるユニット名をドヤ顔で発表しながら、直後に河上選手から「シックハイドロ」とヒゲソリ呼ばわりされてしまいました。
ブラスナックル　あれな、うまいことを言ったつもりで向こうこそがドヤ顔でいたけど俺、そんな商品知らねえし。だからまったく響かなかった。どう突っ込まれようが刺さらない。勝手に言っていればいい。
――まあ、河上選手のことはともかくブラスナックル選手がエントリーされたことでどの選手と当たってもシングルマッチとして新鮮味があるだけに、見る側は楽しみにしています。
ブラスナックル　そっちが楽しみにしていても、こっちが楽しめなければいいモノになるわけがないからな。過去にシングルでやっているのはリンダマンぐらいか？　そのリンダマンも、思い出したくない過去があるな。
――G-RUSHトーナメント1回戦（2025年1月24日、新宿）で、わずか3秒で負けた試合ですね。
ブラスナックル　あれはツーカウントルールだったから負けたまでだ。あのジャーマン・スープレックスも通常のスリーカウントルールだったら明らかに返せた。まあ借りを返すとか、そういう問題じゃないと思うけど向こうが決勝に上がってきたら同じ新宿FACEで3秒を上回る2秒で倒してやるから。
――開始から2秒でスリーカウント獲れるものなんですか。
ブラスナックル　ピンフォールとは限らないだろ。ギブアップも入れると過去最短は何秒だ？
――鈴木みのる選手がえべっさん（現・菊タロー）に1秒で勝った事例があります。
ブラスナックル　じゃあ可能だな。トーナメントの決勝戦が2秒で終わったらインパクトあるぞ…おい、想像すると楽しくなってきたな。これはもう、リンダマンはどんなに汚い手を使ってでもいいから必ず決勝に上がってこい。なんならブラスナックルを使ってもいいぞ。
――おお、ブラスナックル選手の守護神であるブラスナックルを貸すんですか。
ブラスナックル　そこは自分で買え。俺のブラスナックルを気安く使うんじゃねえ。
――決勝でG-REX王者を破って優勝したら、7月1日の5周年記念大会でタイトルを懸けて再戦するのは確実です。年間最大のビッグマッチのメインにブラスナックル選手が立つというなかなかの風景が見られるかもしれません。
ブラスナックル　見られるかもしれないじゃねえ、見られるんだよ！まあ、その意味ではいい流れで来ているよな。ただ、俺はまだほとんど手の内を見せていないから。ハッキリ言って河上を裏切った以後、特筆すべきことは何もやっていない。ただ好き勝手にやっているだけなのに、来ている感が出ている。じゃあ、これで手の内を全開にしたらどうなると思う？　GLEATはガラッと変わるぞ。
――今のところ出す技もブラスナックル関連とジュリア（踏み絵）と、この前の扇町で新技（No Way Out＝コルバタから入るキャメルクラッチ式フェースロック）を出したぐらいですね。
ブラスナックル　本当ならトーナメントまで隠しておくところだが、ちょっとしたサービスで早めに出した。あのな、プロレスは技を出せばいいっていうもん

じゃないんだよ。限られた技だけで成立させてこそプロってもんだ。俺はこの数ヵ月、それでちゃんと回してきたから。

――それはプロレス総合学院で習った教えなんですか。

ブラスナックル　そうだな。

――では、あの頃に月謝を払って学んだものが今もベースになっているんですね。

ブラスナックル　自分で納得できるものに関してはそうだ。それは違うだろと思う不要なものは捨てている。

――そういうところはプロとしてちゃんとやっているにもかかわらず、ただ無法の限りを尽くしているように受け取られているのは損ですよね。

ブラスナックル　まあ、ザコなんてその程度のものだ。ちゃんと見ているやつには、俺がどれほど細部にわたって考えてやっているかわかっているだろう。GLEATの連中も、何も考えていないよな。派手な技を出して、飛んで跳ねて「ウェーイ！」みたいな。

――誰も「ウェーイ！」とは言っていないと思いますが。

ブラスナックル　いるだろ、渡辺壮馬が。

――あ、そうでした。

ブラスナックル　俺は人をイメージだけで見るのはよくないと思うタイプだけど、あいつに関しては間違いなく中身がない。ていうか、中身のあるプロレスを知らずにここまで来たんだろ。だから俺が、このブラスナックルJUNが、トーナメントを通じて中身のあるプロレスを教えてやるから外野でよく見ておけ。

見る側も闘う相手も会社もザコにもかかわらずプロレスを続けているのは…

――大久保の風になった人（頓所隼）も、中身のあるプロレスという言葉を言えるまでになったんですね。感慨深いです。

ブラスナックル　これまではあまり口にしてこなかったけど、これからはそういうことも発信していかなきゃいけないって思ったよ。この数ヵ月、さんざん「ブラスナックルJUNはブラスナックルをつけてただ暴れているだけの男」と言われてきた。ザコの言うことなんて気にする必要はないけれど、ブラスナックルJUNの本質をプロレス界に、世の中に広めることで有名になるのであれば、そろそろザコにもわかるプロレスをやらなければって思うようになった。

――ただ暴れているだけの男と思われるのは心外だったんですね。

ブラスナックル　当たり前だろ！見る側もザコ、闘う相手もザコ、会社もザコだったら、普通はとっととやめて違う仕事をしているところだぞ。にもかかわ

らず続けているのはなんでだと思う？
――……。
ブラスナックル　プロレスが好きだからに決まってんだろ。周りのザコのせいで自分の気持ちを変えたら、それはバカだよ。だから、俺がこの手でザコじゃないファンを育てていかなきゃならないんだなって。次のビッグマッチ（SGC HALL有明）って何人ぐらい入るところなんだ？
――3500人ぐらいですかね。
ブラスナックル　3000人以上いれば、一人ぐらいはザコじゃないやつもいるだろ。新宿FACE、後楽園ホール規模だと全員がザコだから、マトモな観客を引っ張ってくるにはそれぐらいのキャパは必要だよな。もしかすると、そういう出逢いを俺は求めているのかもしれない。でも、それだとあまりに効率が悪いから、もう自分で育て上げていくしかない。
――ちなみに、今まででザコではないお客さんと会ったことがあるんですか。
ブラスナックル　まだ一度も見ていない。
――UFOとかツチノコの世界ですね。
ブラスナックル　だからこそ、モチベーションが持てているのかもしれない。UFO研究家って、常人の想像を絶するモチベーションで何十年とUFOを追い続けているだろ。俺もそれと同じ感覚でザコじゃないファン、ザコじゃない相手を求めているんだろうな。まだトリプルHにも会っていないし。
――ほかのプロレスラーとは明らかに違うプロレスを続ける動機です。
ブラスナックル　まあ、自分のやりたいようにやっているのはストレスがなくていい環境にはある。俺は自分が嫌なことは一切やるつもりがないから。自由にやるための反体制。縛られた所属選手たちの死んだような目を見るにつれ、自由にやれる立場の自分こそが勝ち組だと思っているよ。

――トーナメントに優勝して、そのあとにG-REXのベルトを獲ったらチャンピオンとしての使命を背負う立場になるわけですが、そうなると逆に自由が効かなくなるというケースもあり得ます。
ブラスナックル　なんでだよ？チャンピオンになっても俺はやりたいことしかやらないから関係ねえよ。使命だとかなんだとか、勝手に背負わせんじゃねえよ。ベルトを獲ったところで、自分が有名になるためにプロレスをやることには変わりがねえんだから…ああ、そういうことか、わかったぞ。
――なんでしょう？
ブラスナックル　歴代のチャンピオンがみんな会社の言うことを聞いて、訳のわからないことを背負わされてきたから、それが当たり前だと思ってんだろ？バーカ、俺をそんなやつらと一緒にするなよ。会社の言いなりになって、それが本当の自分だと思うか？
――では、会社側からこの大会でこの挑戦者とやってくれと組まれても…。
ブラスナックル　俺の意思に合わなかったら断固拒否だ。
――河上隆一が挑戦してきたら…。
ブラスナックル　うわー、それをやったら河上は恥ずかしいぞ。トーナメント1回戦で俺に負けるのに、どのツラ下げて挑戦させてくださいって言うんだよ。それは恥ずいわー。言葉にするだけで赤面しちゃうわ。
――でも、今のGLEATは明らかに河上推しですから、ない話でもないと思われます。
ブラスナックル　社長、河上のこと好きだからなー。自分を爆破させた人間をもう一度雇うなんて、正常な神経をしていたらあり得ないだろ。まあ、それで河上を贔屓したければすればいいけど、やってもつまんないよ。結果は一緒なんだから。GLEATはつまらないって思われるだけなのに、それでいいの？　いいなら、まあやってやるけどさ。おい、会社も河上も大丈夫なのか？　俺は本気で心配になってきたぞ。そういうカードを組んでおいて、客が入らなかったら俺のせいにするんだろ？　試合がしょっぱくても俺のせい、客が入らなければ俺のせい、世の中が不景気なのも俺のせい！　なんでも俺のせいにするのは目に見えているよ。
――世の中の不景気までは…。
ブラスナックル　いいよ、それでも俺がチャンピオンになって客を集めてやるよ。団体に有名なプロレスラーが1人いれば全体が潤うからな。絶対に、絶対に俺は有名になってやる。ザコどもはそれを聞いて「ブラスナックルじゃ無理」だとか決めつけるだろ。ほざいておけ、その言葉を絶対に忘れるなよ。
――有名になることへのモチベーションが凄まじいのですが、何ゆえそこまで有名になりたいのでしょうか。
ブラスナックル　金はもちろんだけど、街を歩いていて誰もが「あれ？　今のはブラスナックルJUNじゃん？」って振り向く。それぐらいになりたいから。それこそ変装でもしないと街を歩けなくなるぐらいにな。
――あれはあれで大変そうですよ、プライバシーがなくなって。
ブラスナックル　俺はまったくかまわない。そこまで有名になった上で、世間が「プロレスラーといったら誰？」と聞かれて満場一致で「ブラスナックルJUN！」と答えるようになる。それが理想。
――言われてみれば、この十数年とそのポジションを担ってきた棚橋弘至選手が引退したので、空き家にはなっています。
ブラスナックル　そこに入るのは俺だ。そして日本だけじゃないぞ、世界的にも有名になる。アメリカにいこうが南極にいこうが、地球上の誰もが知っている存在にな。
――海外に出ることなく、日本での活動を続けてもそれは可能だと思いますか。
ブラスナックル　いや、思っていない。だから世界へ出る。ここはザコばかりな

んだからいつやめたっていいんだよ。GLEATに対する愛着なんざビター文ない。それよりも、小さい頃から思い描いていたことを実現させる方が優先されるのは当然のことだ。

――どんな夢を描いていたのですか。

ブラスナックル　小学校5年か6年生の時に将来の夢を発表するみたいな場があって、クラスメイトの前で「世界で通用するプロレスラーになる」って言ったんだよ。普通、そこは「プロレスラーになる」って言うところだろ。でも俺は最初から“世界”という言い方をした。小学生のガキでありながら、すでに全世界を視野に入れていたんだ。だから、GLEATには俺が世界へ出るための踏み台になってもらう。

――ハッキリ言いましたね、踏み台と。

ブラスナックル　そりゃそうだろ、なんの義理もないんだから。それどころか人がキメの台詞を言おうとした時に妨害するような会社に留まる筋合いなんてないだろ！だからこのトーナメントに出る7人はすみやかに踏み台になりなさい。特に1回戦で当たる河上！おまえは踏み台中の踏み台だ。

――ああ、それでジュリア選手のあの技を！

ブラスナックル　今頃気づいたか。あれは世の中のすべてを踏み台にするという意思表示だ。踏みつけられるザコどもの数だけ、俺は世界に近づく。それ以外は何もねえ。さっさと帰れ、このザコ!!